京山房丸
京山著為
繪花百十八書

274
182

始

特101
244

京都帝國大學圖書之印

十八番

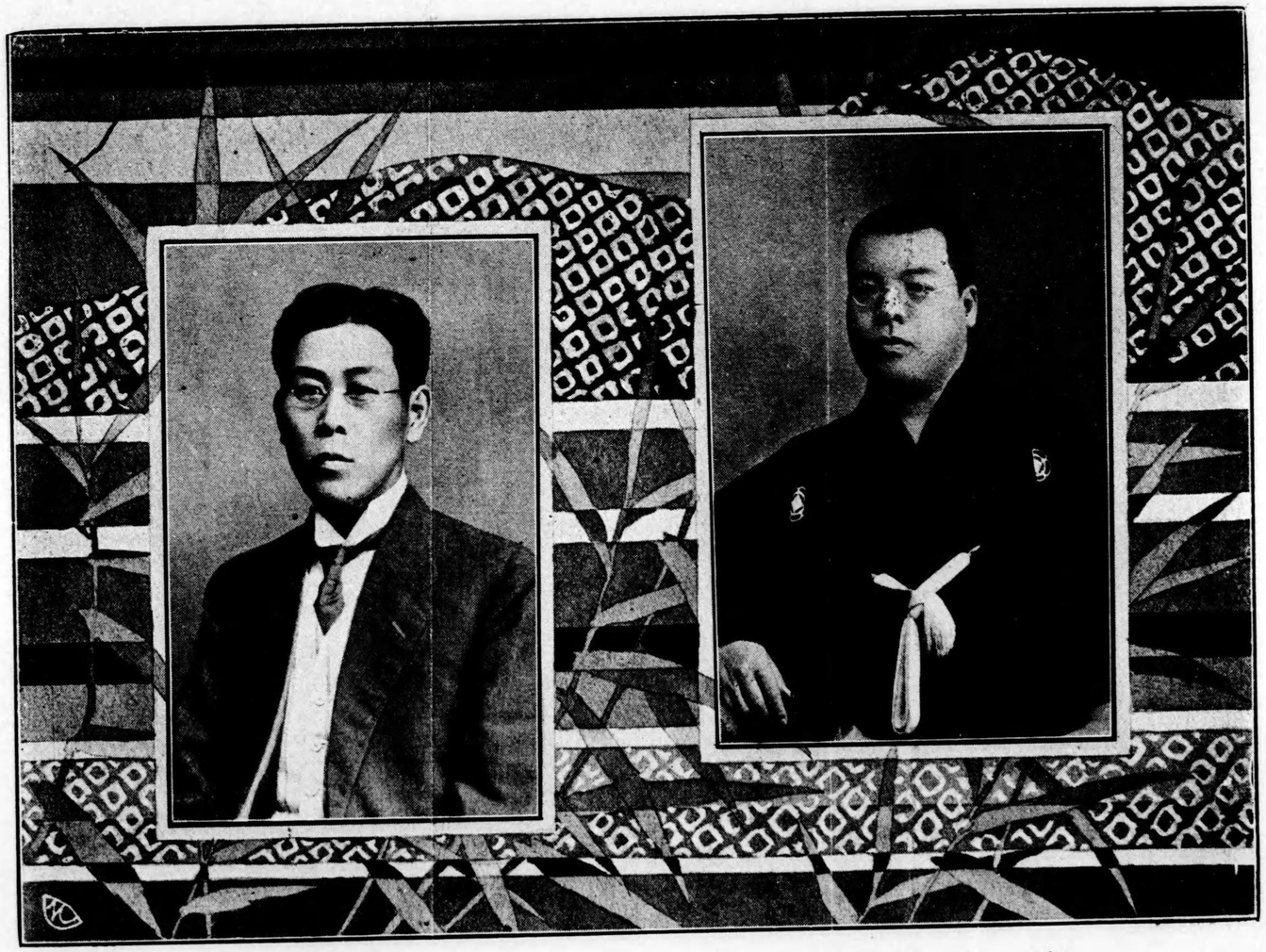
浪花節と言へば直ちに聯想されるのは武士道皷吹である武士道皷吹と言へば大石内藏助以下四十七人の赤穗義士に止を刺して居る。浪花節＝武士道皷吹＝赤穗義士この三者は切つても切れない深い仲である。けれども浪花節は必らずしも武士道皷吹でなければならないといふものでもなく又赤穗義士に限られた譯でもない。乃木大將夫妻の殉死も武士道であれば日露の役に大君の爲めに一命を捧げた勇士も亦武士の典型である。本書の講演者

京山若丸は主としてこの新らしい現代に適合した武士道を皷吹せんと努力するものである。而して京山恭爲は同じやうに浪花節界の新方面を開拓して行きながらも若丸とは違つて尤も通俗的な勸善懲惡勤儉力行を說かうと企てゝゐるのである。編者が本書を公にせんとする理由は改めて言ふまでもない、それは若丸恭爲が行かんとする道、說かんとする所と同じものである。

東京日日新聞社編輯局

編者

大正二年六月



京山若丸　　京山恭爲

召集令

京山若丸

フシ『海行かば、水漬く屍、山行かば草蒸す屍、大君の許にこそ死なめ仇には死なじ。』

藝州廣島より聊か隔てし矢野と呼ぶ村落あり、夫婦生活に兒が二人、細き煙りの痩せ世帶。主人は松岡幸造と云ふて、廣島の生れ、細君はお種と云ふて、岐阜縣美濃の國大垣の生れ、是が廣島で野合の夫婦となつた。其の日の生計が至つて貧しい、加之に二人の兒がある、兄の兒は六歳、弟の兒が三歳、細君は三年以來の長煩ひ、床に就いた儘動

く事が出來ない。兄の方は至極無難に育つ如であるが、弟の方は育ち難い、搗てゝ加へて貧乏だから喰ひ物が惡い、爲めに乳も多ほく出ない、夫れで隣伍に貰ひ乳に行く、初めの間は貰ひに行かなくても近邊の細君が呉れたけれども最早三年にも成ると貰ひに行つても、然う好い顔ばかりはせぬ、他人が自然と面倒がる、と云ふて、ミルクを買つて飲ませる腕も無いので毎日麥の汁ばかり飲ませて居るから、痩せ衰へて骨と皮未だ此の上痩せ度いが骨が邪魔して痩せられぬ。幸造は毎日百姓の傭れ仕事をして、日に三十五錢の賃錢を貰ふて漸く其の日の飢餓を凌いで居る。今日も三歳になる兒を背に負ひ、六歳になる兒の

手を取つて、畑の仕事、弟の兒を樹の下に寢かし、兄の兒が保姆を爲て居る、親は專念に畑の中打ち、親の心子知らずとは能う言うた、汗水垂らして親が中打ちをした跡を兄の兒が蹈み亂つて歩く。

幸「是ッ、左樣なに爲るでは無いぢやないか、サンコ泣いてるぢやないか何故保姆をしてやらンか」

子「サンコ泣くよ、モウ歸るよ」

幸「アー、兒は三界の首枷械ぢや、泣いて呉れるな賴む、お前も此世に緣が無いものなら、一日も早く此の世を引き取つてくれ、分限者の子女達ヤ鼻感冒も罹かぬのに、能く轉ろ轉ろ死ぬるが、貧乏人の餓鬼

共は何故斯んなに密着强いだらう、サー、歸る、歸る、歸るよッ」

フシ『泣く兒を背に幸造が、我が家に歸る途次、折しも出會ふた一人の紳士、山高帽を目深かに冠り、テエラン提げて、黑の洋服駒下駄穿き。

洋服に駒下駄と云ふ圖は、一番見つとも能いものだ、幸造見るより

幸「ヤー、是や親方、誠に面目ない處でお目にかゝりました」

男「ナニが面目無いか、何處等が面目ないのか、今迄貴樣の嬶の枕許に熱臭ひのを我慢して待て居た、壹圓に附いて一日三錢の利の付くと云ふ事は得心して使つたんだらう、モー利は積つて拾圓にも成つて居

るぢやねエか、何に……、ヤー、イカン、イカン、人を馬鹿にするな昨日俺は藝備新聞を見たぞッ、松岡幸造は壹圓七拾五錢と云ふ金を軍資に獻納して居るではないか、軍資に出す樣な氣樂な金が有るなら、ナンデ一文でも家の金に拂はんか」

幸「夫りや親方のお詞に、何も口對へを爲ぢや御座りませんが、仕事先で藁を貰つて來て、女房の介抱の傍、枕許で、草鞋や草履を作つて夫れを海田市に持つて行つて、賣つたお金が參圓餘り、アー今度の戰に就けては、我々も難儀だが、隨分辛い人も往かれるであらう、思へば、天皇陛下の御宸襟……」

男「エーッ、生意氣な事を云ふな、政府は貴樣の如な貧乏人の拾や貳拾の金を目的には爲て居らんわヤイ、夫が爲めに平常から、ヤレ所得稅、ソレ增稅、ソラ戰時稅、汽車や船に乘つても通行稅、アレも稅、コレも稅と何が爲めに政府は租稅を取り奪つて居るか、危機の時は國民の御厄介にならず、政府は一手で行らうと思へばこそ、又國民も然う思へばこそ、負擔も出來たもんだ、亦日本と云ふ國は何で斯んなに戰の好きな國だらう、二十七八年の日淸戰爭、夫れが濟んだと思や、三十三年の北京の戰爭、是も濟んでヤレ安心と思ふ間も無く此度の戰だ、而して今度は露西亞を對手の戰だぞ、思や情け無エ喧嘩國へ生れ

て來た、夫りや今迄は支那人を對手の軍だ、日本人の頭を見せたら、千里も前へ逃げもしよう、支那を對手の戰なら汝等勳章も恩給も附くだらうが、今度の露西亞を對手の戰にや、氣の毒だが一人も生て還る者は無エ、彼れ丈け到る處の港や停車場で皆萬歳萬歳で送られて居る兵士が、アリヤ皆死で戻るンだ、考へても見ろ國の廣さが世界の七分の一で、人間の數が一億七千萬だ、今度の戰にや貴樣も行くだらう、イヤ、モー近々に行くと聞いた、死んで戻る人間は錢は一文も能う貸さぬ、百貫の代償に編笠だ、俺や此の鍬を貰ふてイヌルぞ」

「若し親方、夫りや仕事先の品で御座いますから、何卒夫ればかり

は御勘辨を願ひます」

男「イ、ヤ、左樣な事は俺や判らぬ、貴樣の持つて居る以上は貴樣の品として差押へる權利がある」

フシ『頼めど聞かぬ高利貸、往來の人は足を駐めて見物する。何者一人として松岡の辯護する者は無く、理由釋らねど手を引かれたる六歳になる兒は泣き出す、先刻より後方に偸聞巡回巡査、穩ならぬと認めしか、人押し分けて仲に入る。』

巡「オイ待てッ」

今、松岡の鍬を持つて行かむとする高利貸を、

男「ヘエー」

巡「今、何を言うて居つたか、モー一度本職の前で言つて見い」

男「……」

巡「髯さへ捻つて洋服を纏つてさへゐれば紳士と思ふか、多くの貧民に高利の金を貸して、其貧民の膏血を搾つて安樂に飯を喰ッて居れば夫れで人間と思ふか、對手の人が金が出來ぬから此の物品を持つて歸つて下さいと詫るものなら夫りや可い、仕事先の鍬であると斷つて居るぢやないか、其の者を持つて歸つて見ろ、直ぐに處分して遣るから又、彼れ丈け行く兵士が一人も生きて還らぬとは什麼かッ、言語道斷

の奴ぢや、……コレ、お前達は何故其處に立つかッ往來の妨げになるぢやないかッ……、大體催促を爲て居る權利の有る金は何程か、……コレッ立つちやいかん……、十圓ン、十圓位の金は何かッ、若し松岡幸造が戰に往つて、其の後で金を請求する先が無くんば俺に請求せい俺は本村受持の金子と云ふ巡査ぢや、又、俺に請求しても、當然に拂ふ事は出來ない、裁判の制裁を仰げ、拂ふ可き義務の有る金で有つたら拂ふ、拂はなくて可い金なら一文も拂はん、何ンでも可いから往けッ」

高利貸先生、滅茶滅茶に叱られた、

幸「……」

巡「儂は、君に手を合はして拜まれる如な事を爲た覺は無い、理の有る一方を君の爲に陷穽たと云ふ譯ではなし。言はば高利を貸して貧民を困しめる奴を、懲戒した迄だ、而し松岡君。君も困るぢやないか、アー言う高利の金を借りる君が惡いのぢや。夫れも生計が貧しいからであらう。松岡君、君も貧乏であらうが僕も貧だ、世の中に貧程辛いものは無いねエ、マー君休みの日には遊びに來給へ、僕が酒を一合買はう。貧乏人が集まつて一杯飲みながら胸襟を披いて大いに語らうでは無いか、相變らず細君が病いので困るのう、又其の背の兒は能う瘦

たもんだのう、アー今、僕が宅を出かけに親族からミルクを二本持つて來てくれたので、子女は居らず僕は嫌ひだ、君の處の細君は乳が出ないと聞いたから、今投げ込んで置いた、其の兒は飲むだらう、……ウン、夫れぢや飲ましてやつてくれ、失敬しよう」

フシ『二三歩前に歩みしが、足を駐めて金子巡査、歸る松岡の背後を凝視、思はず零す男子の熱涙、儂の生れは遠國の者、此の附近に親族はなし、女子も居らぬにミルクを吳れやう筈は無し今朝巡回の途、戸籍役場に立ち寄れば、松岡の召集令狀。明日の十一時には、病氣の女房二人の男兒を後にして、戰地に臨む彼れが心中、察する

に餘りあり、爲めに無い金工面して、二本のミルクを贈りしも、決して彼れに與ふるに非ず、是も聊か國の爲。』

フシ『歸り來たつた松岡が、伏した女房の枕邊に。』

幸「お種、今日の容態は什麼だ」

種「餘程善う御座います」

幸「夫りや結構だ、男兒が泣くもんだで、又今日も仕事を半日潰した、什麼ぢや、久し振り湯でも使はんか、腰でも疲憊くば揉んでやらうか、ウン」

種「ネー貴方、貴君は何ンでソンナニ妾を窘めるノ」

幸「妙な事を言うぢや無エか、俺がお前を窘めた覺へはない」

種「イーエ、窘めると言うもんでしょう、三年以來の長病ひ、自分の所天に勿體ない、汚穢ものゝ濯ぎ洗濯まで爲て貰ふて、何程親でも愛相を盡すだらう、夫れに今日迄貴方、妾の介抱に附け可厭な顏一度見せた事がありますか、妾は貴方の罰で癒くはならないのです」

幸「ソンナ莫迦な事を言うから不可ない、お種マア聞け、金が有て、財産が有つて、其の日を樂に暮して居りや、嬶も男も用る道理のものぢや無エ、一ト晩何錢の女郎買ひに往つて見ろ、其の方が餘ッ程愉快だ。夫婦の仲と言うものは、不遇落魄なつて、首に袋をかくれば共、

食へば共、食はざれば共、是が夫婦だ、俺が病氣の時も如斯に爲て貰ふと思へばこそ、ならぬ介抱も出來たものだ、ソンナ心配するな、而し何方か來や爲ねえか」

種「アノネー、お役場から二人見へました」

幸「何か用の事か」

種「斯んな物を持つて來ました」

フシ『唯、眺むれば、疑ふ方なき召集令狀、轟く胸の咄嗟の間、病める女房に心配させじと。』

幸「是りや、わりや知らむ、アーお上樣と言うものは、後向けには寢

まれぬ、一昨年、俺が筆墨の商賣を爲て居た時分に、稅金の不納が六拾五錢、俺を貧乏と思へばこそ待つて居て呉れたのだ、是りや鎌を揮に代へても納めにやならぬ、俺は是から仕事先へ往つて借りて來やう、サンコ置くよ、元、來い往こう」

種「ア、若し、鳥渡、未だ斯んな赤い襷が……」

幸「是もわりや知らん、お種、此頃此近所に本疱瘡の流行する事が無數だ、夫れで宮島樣に御祈禱が出來て、御神酒で濕した赤襷だ、是をかけて居れば、疱瘡が取り附かねエてんだ、弱身を附け込む風の神だ、俺等の體軀にソンナ物が取り附くか、われの體軀に取つ附いて見ろ、

泣きッ面に蜂だ、俺が居ても起つても居らりやせん、世は呪咀だ、われの肩に斯うかけて、ナンデ泣くかお種能う聞け、われが病氣が全快して此の襷をかけて、臺所を働くわ、男兒の養育するわ、俺が邪魔ものが無くて鍬一本で稼ぐわ、泣いた事は笑つて暮す時節も來るよ、人間と言うものは愉快の爲詰めでは不可ねエ、苦勞の仲から積み上て、今日は休みだ、子供を連れて花見に出かけるは、是が眞正の愉快だ、俺は是から借りて來やう！」

フシ『六歳になる子の手を執りて、表に出づる幸造が足を早めた組頭の宅「旦那喜んで下さりませ、今日迄お村方の厄介物、明日から軍

服身に纏へば、誰憚からぬ軍人です、死するも生きるも國の爲、只後髪を曳かるゝは病氣の女房、惡戯盛りの男兒を殘し、貯へとては一厘も無く、是が一トつの氣懸りです、お組頭の情けにて、溫ひものとは申しません、冷たい飯の喰ひ殘りでも、苦い澤庵の端なりとも施しなされて下さい」と頼むに無情の組頭、「世話してやりたいが、お前一人を世話したら、軒別世話せにや相成らぬ、如何なとならう」と、突き放され、再び頼む勇氣も無く、悄然歸る村外れ、無常の風に散りて行く主の男女は分らねど、今葬式の出る處、多くの人足集りて、各自に結飯を喰つて居る、大人は更に氣が附かねど、連れた

我が子が早くも見附け、父の執る手を振り放し、飛んで行きたる人足の前、指を咥へて欲しさうに。』

子「伯父さん結飯は旨いか」

フシ『聞くに驚く松岡が。』

幸「男兒と云ふものは仕方が無い、喰つても喰つても賤い」

フシ『と、我が子の頭を平手で撲き、手の拔ける程引ッ張つて人の見へない影に來て、撲いた我が子の頭を擦り、引いた我が子の手を揉んで「其方は幼稚だ無理は無い」聞いて稚兒喜んで、父の顔見て笑顔を作り、舌の廻らぬ言葉にて「チャンよ、家のかあさん何時死ぬ

か、家のかあさん死んだなら、白いおまゝが喰べられる」聞いて驚愕松岡が、萬一や歸りて誠なら、如何なる不幸の辻占にやと、歸り來たつた我が住居。』

詞「お種、今戻つた、ア、、モー貧乏と云ふものは仕度く無いものだ六拾五錢の遣り繰りに今迄かゝつた、お種ッ　お種ッ、暗かつたであらう、今灯を燈してやらう」

二分心洋燈にボンヤリと灯を附ける、差し出す灯に女房を見て、

幸「お種ッ、ヤッ、ヤッ、ヤーッ」

子「チャンよ、かあさん死んだよ」

幸「お種ッ――、能う死んでくれた……ッ、わりや此の切れない鮪庖刀で自害を爲てくれたかッ、定めし辛かつたであらうノー、別段殘念とも殘り多いとも思はぬが、われが病氣に罹かつて三年以來、口當りの善い物一度喰はせずに殺したのが殘念ぢや、何事も俺の如な甲斐性の無い者に連れ添つて居つたが因果と諦念めてくれよ、お種ッ、われの遺書今見るぞッ」

フシ『溢るゝ涙瀧津瀨の、悲しみながら書き殘し申し候、三年此の方の長病ひを、一日の如くの御看病、御勿體無い吾夫樣、今日持つて來た召集令狀赤襷、樣子は知つて居りまする、知らぬ振りして尋ぬ

れば未だも妾を養ふの御心、外の事とは違ひます、退引ならぬ御上の御用、病氣の女房惡戯盛りの男兒二人を殘し、貴方が一人戰地に向ひ、思ふ樣にお手柄が出來やうか、其の爲めに妾はお先に自害を爲ます、不便ではあるけれど殘る二人の男兒を貴方は刺し殺し、夫れを一トつの血祭りに、敵と目指すはロシヤの兵、生きて凱旋なさらぬ樣、名譽の戰死を遊ばす樣、草葉の蔭から祈ります、貴方のお越しの前の世で、親子四人が落ち合つて、互に手に手を取り交し、死出の山路の高いのも三途の川の深いのも、共に、共に……とある遺書。』

フシ』女房出來した、出來しやつた、躊躇はならぬ是を見よ』我が子をヒン抱き鮪庖刀を逆手に持ち、胸板見かけて只一ト刺し刺さんと爲せし其の剎那表の雨戸を開く間遲しと押し破り、這入り來たつた金子巡査、松岡の持つた兇器を奪ひ取り、利腕押へて。』

フシ『コーレ、待ち給へ松岡君早まるな、死んだ女房は仕方が無い、殘る男兒を刺し殺し、君が一人で戰地に往き、夫れを忠義と思つたか、夫れは不忠だ、大反た、夫れ程後が氣に懸かれば、養育萬端僕が引き受けた」と、云ふ折から門の戸開ひて入り來たつたる高利貸、框端に兩手を突き、「免してくだされ警察官、堪忍てくれェ松岡よ、

彼れから宅へ歸つたら、忰が廣島の高等師範學校より歸りた處、壓制な巡査も有るものと、我が子に話を爲たなれば、再も我が子に意見され、初めて夢が覺醒ました、後の養育萬端は及ばずながら私が引き受けた」聞いて喜ぶ金子巡査、能く出來ました金貸業、噫、人の性は善なるものよ。』

フシ『直ぐに葬儀の準備にかゝる、所天の爲めは國の爲、我から散りにわくら葉の、佛に通夜も眞似事の、明くれば早くも出棺に、村人涙で見送りの、向ふの方より、近藤、小林、坂上、打出、出征祝すと書いたる旗、風に翻々かせ、萬々歳と唱ふ聲、天地も震動する有

様。』

フシ『オイ松岡君、君は細君の葬式送らにやならねど、君は僕等と一所の入營、此處で一ト汽車遲れたら、先方で二時間待たねばならぬ夫れでは不可ぬ、此方へ來たれ」と、出征兵士に連れ込まれ、健氣な女房の死別を横に、急ぎて來たる停車場、汽車に乘つたり時間が來る、車掌が發車を吹笛に海田市に向つて進行せんとする間一髮、職務を忘れて金子巡査、官服纏ふた其の儘に、六歳になる兒を背に負ひ、三歳になる子を横抱きに、プラットホームに飛んで來て、「ヤー、松岡君出征か、君の首途の見送りは、不肖巡査も爲て居るぞ、

總領息子は背に居る、君の出征祝してか季の息子は莞爾と笑ふて此處に抱かれて居る、君の女房は是此處に……』と、服囊の中より取り出す白木の位牌、

釋妙鏡信女　松岡タネ

と記しある。

フシ『語るも聞くも涙の種……。

三人書生

京山恭爲

フシ『雲か霞か山の端か、一寸さきは暗き世で、はかり難きは人世なり、主家の少なからぬ金子を使ひ込みました直七、せつぱ詰つた上句がもう仕方がないと云ふので、今宵しも根岸の海邊に身投げをしましたところへ、思はずも戀人お園のために救はれまして、直七の一命は取り止めました、それより兩人が手に手を取り、住み馴れし横濱を後にいたし、東京芝は新錢座のところに、直七の叔父がランプ商を營んで居ります、その叔父を頼寄つて參りました、お園を戸

外に待たして置いて。』

直七「御免下さいませ」

叔父「へい來らつしやい……、オ、お前は直七ぢやアねいか、マアこつちへ上れよ」

直七「有り難うございます」

叔父「マアお前も壯健で結構ぢやノウ、質屋の方も無事に勤めて、今ぢやア二番々頭にまで昇進なし、今年あたりはいよ〳〵店を持たして貰ふやうにでもなつたのぢやらう、叔父も眞實に蔭ながら喜んでゐる、何かソノそんな用事の相談にでも來たのであらう、マアなんぢや店出

しなら、この東京の方が一番良いぞ、お前も東京へ來て店を持つた方が發達の見込がある……、直七マア此所へ上れ」

直七「ハイ有りがたうございます、叔父さんに店出しの御相談にでも參つたやうな、然う云ふ嬉しい相談なら結構でございまするが、なかなか夫れどころではございませぬ、實は長らく勤めました、佐原の御主人より御暇が出ました、誠に叔父さんにも會はす顔がありませぬ」

叔父「ナニッ、ヤイ直七、手前の身に何か出されるやうな粗略でもあつたのか」

直七「實は私の粗骨から飛んでもない失策を致しました、横濱元町に住

んでゐる長谷川甚五郎の娘におそのと云ふ者がありまして、その者がお店の方へ着物を一枚持つて參りましたが、それが三十度あまりも出し入れをいたしますから、私が不圖尋ねて見たら、家が貧乏で一ぜん飯を出しに行く、その資金に詰つては來るものと知れて、私はその娘の親孝行に免じて、二圓の金を惠んで遣りました」

叔父「ム、それで親方が惡いと云ふのかい、人に金を惠んで惡いと云ふやうな、そんな分らない親方なら、この己れが行つて一ッ談判をしてやる、分らねへ奴だナ本當に……」

直七「イエ叔父さんマア私の云ふことを終ひまで聞いて下さい、叔父さ

んそんな端した金ぢやアなか〳〵お暇も出ませぬ」

叔父「そりや然うだらう、ナンボ何でもそんな端した金ではお暇も出る筈はあるまい、それから何うした」

直七「初めおその丶親孝行に免じて恵んだ二圓が因縁となり、ツヒおそのと割なき交情となりまして、その長谷川のために一萬餘圓を使ひ込み、マンマと長谷川の手に載せられました」

叔父「それでは暇が出るわい、成る程話の結末を聞かねば分らぬ」

直七「そのことを遂に横濱の假名がき新聞に出されまして、その後主家を出されてから、その長谷川の宅へ參りますると、私の貢いだ金で三

階の家も建て、贅澤を極めて居ながら私が頼寄つて行けば、寄つて集つて散々ッぱら袋叩き、無念で堪らぬが多勢に無勢で勝てないので、そこを退きまして、もう是れまでと根岸の海岸に身を投じやうとするところをば、計らずも長谷川の娘おその丶爲に助けられ、死ぬる心も止まつて、互ひに手に手を取り交はし、東京さして參りましたやうな始末、どうか叔父さん何分お助けを願ひます」

叔父「成程そんなことであつたか、マア可いから此方へ上れ」

直七「ハイアノ叔父さん、おその丶と云ふ娘は戸外に來て居ります」

叔父「ナニ、おその丶も來て居るのか、何故こちらへ入れねへんだ、こち

らへ通せ」

直七「ハイ叔父さんマア御覽なすつて下さい、何所に不足もござりませぬ、十人並すぐれた女」

叔父「オイ〳〵、ヤイ惚氣を言ふない」

その「アノ初めてお目に懸ります、妾は長谷川甚五郎の娘そのと申します、父甚五郎の不義理不人情を見兼ねまして、直七樣と共に東京に參りました、何卒お力添へをお願ひ申します」

叔父「ム、然うか……マアこちらへ上んな」

その「ハイ有り難うござります」

叔父「成る程こいつア一萬圓以上の價値がある、マア斯うなつたら仕方がねい、直七も兩親を失つたら、この叔父が親も同然だ、遠慮氣兼は要らねいからネ、當分自家で厄介になつて居な、その內には何とかして小さい店の一ッも出さしてやるから……」

直七「そこで叔父さん、その佐原の主家を出るときに、三百圓と云ふお金を貰つたから、其れを資本に何か商賣をいたしたいと思つて居りまする」

叔父「然うか、そりやァ好い都合ぢや、そんなら俺のやつて居るランプ屋をしろ、ランプ屋を、之れをするひにやア、俺も勝手が分つて居る

しするから」

と云ふので直七はおそのと共に叔父の膽煎で、芝の烏森町にてランプ屋渡世をいたし、店もだん〳〵發達して參りましたが、さて人間と云ふものは、素と是れ病の器、或る日直七風邪を冒いたが病氣のもと。

フシ『樂しく暮す直七夫婦、女波男波の穩かも、こゝに困るは直七が、不治の病の肺をやみ、二年此の方大煩ひ。最初は叔父のお世話になつては居たけれど、長年の月日重ねしことなれば、叔父も介抱が屆きかね、可哀想にやその風姿が以前に異るやつれし姿、破れ衣服は一枚で、苦勞をいたすおその坊病氣介抱のかた手間に、ランプホヤ

の破屑を買ひ集め、細々立つる竈の煙り、或る日のことに、おそのさんが急いで來たのが淺草橋、俥に乘つて通りかゝると、不圖甚五郎と板場の龜吉の姿を認めた、アッと吃驚りいたしたおその見られては一大事と、そのまゝ横町へプイと反れましたが、心の裡は一入の心配……、お話變つてこちらは長谷川の甚五郎と板場の龜吉、惡いことばかりをいたして金子を澤山に捲き上げましたが、惡錢は身に附かぬものとは能く言つた、直七からボッたくつた金一萬圓も其後相場に手を出しての大失敗で原の木阿彌、此上はなんでも東京へ駈落したと聞いて居る娘のおそのを尋ね出して、横濱のさる外人の

妾となして金を儲けんと、二人で捜しに來ました、いましがた淺草橋で遇ふたおその見附けられては一大事、どんな非道い目に遇はされるかも知れぬと、一目散に自分の家へ俥を飛ばして戻りました、俥を飛び下り家へ飛込んで。』

その「和郎、只今歸つて來ました」

直七「アヽおその戻つたか、大層今日は歸りが遲かつたぢやないか」

その「ハイ只今歸りがけに、淺草橋で以て阿父さんに會ひましたよ」

直七「ナニッ、甚五郎に會ふた？そんならお前見つけられたゞらう」

その「ところが御覽の通りの姿がやつれて居ますから、對手も分らなかつたやうでしたが、何だか汚ない着物を着て、板場の龜吉を連れまして、シヨボ〳〵歩いて居ましたよ」

直七「惡錢が身につかぬとは能く言つたな、最う金も皆無くしたのだらう、今日は店を早く閉めると仕やうぢやないか」

その「ハイ只今仕舞ひませう」

と除々その仕度にかゝつて、もう戸も閉ぢましたところへ、外からコツ〳〵と叩く人あり。

△「御免なさい〳〵」

その「ハイ誰方でござりまするか」

△「ヘイ晝間戴きましたホヤがランプの口金に合ひかねますので、濟みませぬがお代へ下さいまするやうに……」

その「アラ左様でござりまするか、其れはお氣の毒さま何卒こちらへお這入り下さいまするやう」

と戸を開けますれば、バッと入り込んだる男二人。

△「ヤイ、コリヤおその、手前ほど親に不孝な奴はねいや、二年前に手前が飛び出したので、阿父さんは方々捜して居たンだ、おその今直ぐおれと一緒に横濱へ歸れ」

その「イエ阿父さん妾は何うしても歸ることは出來ません」

甚五「ナニッ、親に向つて口答へをする不孝な女奴ッ」

その「デモ妾は今は斯うして此の家に厄介になつてゐる身體でござりまず、況して直七様は不治の御大病、之れを不人情にも放ッて歸れませうか」

甚五「ナニッ、大體直七の奴が居るからこの女が歸らねへんだ、奴を引ッ張り出して打てッ〳〵」

と龜吉に申しますと、板場の龜吉持つて居たステッキで直七を捕へて丁々としばきまする。

直七「ア痛いッ〳〵」

と肺病でやせ衰へた直七は悲鳴を擧げて苦しんで居る、見て居るおそのは、

その「アレ阿父さん、そんな無茶なことをなすつては……、あなた……人殺し……」

直七「人殺し……」

甚五「人の娘を連れて逃げて、この野郎提灯も鐘もあるかい、娘を返すか返さぬか、サア何うぢや」

と無理無體に言ひ寄りまする、戸外には此の騷ぎに何事ならんと人山を築いての見物。

△「亂暴な奴もあるもんぢやねいか、あんなヒョロ〳〵してる病人をステッキで打つなんて、酷い奴だな」

×「誰か救つてやる奴はねへのか」

などゝ云つてゐまするところへ巡査がやつて參ります

フシ『あの人だかりは何であらうと、靴音高く駈けつけて見ればこの有樣なり。』

その「助けて下さいッ、泥棒ぢや」

甚五「親をとらへて泥棒とは何ぢや」

人押分けて飛び込んで來ました巡査に、長谷川の甚五郎も板場の龜吉

も驚いて泡を喰つて居ます當人に、

巡査「オイ何が爲にそんなに人を打つか、其方は何者ぢや」

甚五「ヘイ俺ア元は横濱で牛肉店を出して居つた長谷川の甚五郎と申す者で……、此れは俺の娘でごぜへすが、二年前に當家の主人と一緒に東京へ逃げて來て行方が知れなかつたのを、やう〳〵今日見つけ出して取り返そうと思つてゐるところで……、こゝの奴がソノ私の娘を拐わかして連れ出したので……、ヘイ」

巡査「オイ此所の主人お前は何所が病いのか、今この甚五郎と云ふ者の申し立てたに相違ないか」

直七「ハイ、御迷惑を掛けまして申し譯がございませぬ、之れには深い仔細がございまして、二人東京に參りました」

巡査「ムヽ、オイ其のステッキを持つてゐる者は何ぢや」

龜吉「ヘイ私は板場の龜吉でございます」

巡査「姓は何と申す」

龜吉「ヘイ私は板場の龜吉でございます」

巡査「姓は何と申すのぢや……名前と苗字とは何と云ふのぢや」

龜吉「矢ッ張り俺は板場をしてゐますから板場の龜吉で……」

巡査「お前の出生地は何所ぢや生れは何所ぢやナ」

龜吉「長らく横濱に住んで居ります」

巡査「何所で產れたかと云ふのぢや」

龜吉「そんなことは分りませぬ、矢張り横濱に住んでゐるんで……」

巡査「諾し分つた、お前は無籍者ぢやナ」

龜吉「何にも分りません、板場の龜吉でごぜへす」

巡査「何にしても打つと云ふことは宜くない、今は己が子と雖ども之れを安りに打つことは成らぬやうになつて居るのぢや、理由があつたら何故警察署に訴へぬか、兎に角皆四人とも一應取調べるから本署まで連行する……、オイ直七と云ふ主人は歩けるか何うぢやナ、歩けねば

俥でも雇うてやるが何うぢや」

直七「ハイ有りがたうございます」

と病人だけは俥にて出頭させる、話變つてこちら叔父の政吉、誰に聞いたものやら今出んとするこの家へ一目散に馳け込んで來た。

政吉「オイ直七何うしたんだ、誰がおれの甥を打ちやァがつたんだい、サア來い……直七何奴ぢや、手前を打つたのは……」

直七「叔父さんッ、何故もつと早く來て下さらぬ、私は殘念ですッ」

政吉「もつと早くつたつて、おれにしちやァ早く飛んで來たんだが……手前打たれたのは何奴ぢや」

巡査「オイお前は何者か」

政吉「ヘイ俺しやァこの柏原直七の叔父でごせへすが、只今聞きまして馳け附けましたので……」

巡査「アヽこの事件に就ては一應本署へ連行し上相當の手續をいたすから、騒ぐなよ」

と小林巡査は一同を連れて芝警察署にと引上げました。

フシ『その晩は調べることも出來ないで、小川警部は言葉を殘し一時四人を預り置き、その夜が明けましたら、署長田中銀太郎殿、筐と事情を調べたら、長谷川甚五郎、板場の龜吉兩人が芝の橋本町の篤

口旅館に泊つて居りましたが、その旅館の主人磯吉を參考人として警察にと引き連れる、早くも四名を引出す訊問所、田中署長のお調べなり、第一番に柏原直七に、

田中「何所か病いか」

直七「ハイ肺の病氣に罹つて居りまする」

田中「フーム、芝烏森のランプ商、柏原直七とは其方か」

直七「二年前より、この長谷川の娘そのを其方の家に置いてあつたと云ふが違ひないか」

直七「誠に申し譯がございませぬ、併し之れにはいろ〳〵と事情があり

まする、實は斯う〳〵爾か〳〵の次第で主家の金一萬圓を消費いたし金の切れ目が縁の切れ目で、到頭長谷川の爲に袋叩きにまでされて、此地へ參り前記の烏森にての始末」

と細まゝ〳〵と申し立てました。

田中「分つた、オイ長谷川娘そのと直七とは好いた、好かれた情交なれば、飽くまで添ひ遂げさせてやるが親の情けと云ふものぢや、併しそのよ、其方は一旦親の手許へ歸れよ、さうして更めて芽出度、直七の許に嫁するやうにせよ……、オイ龜吉お前だけは警察に殘して置く、何故あんな病者を打つたか」

龜吉「親方の命令で打つたのです」

田中「馬鹿を云ふな、皆三人は歸宅を許すお前だけは殘して置くぞ」

龜吉「へイ何うぞお頼み申します」

と云ふことになりました、之れを聞いた甚五郎は大喜びで大威張り

甚五「態ァ見やァがれ、親の威光はえれへものだらう、ヤイ直七、手前がナンと言つたつて駄目だ、出る所へ出れば立派に斯うしてそのはお れが連れて行けるのぢや」

とあんまり威張り返しますので直七も今は堪らず

直七「然う云へば甚五郎さん、氣の毒だが私も默つては居られません、

あなたに欺されて私が一萬圓の金を遣つたのは、之れは私の失策ですから何とも申しませぬが、あなたは根岸の海岸で……人殺しをした甚五郎……」

甚五「ヤイ〳〵止せよ、そんなことを云ふのは……イヤ左樣なら」

とおそのを連れて歸らうとするのを呼び止めなされた田中署長

田中「オイ甚五郎ッ、歸ることはならぬ、一寸待てッ……」

甚五「へイッ」

直七「甚五郎さん、斯うなつたらあなたのことは皆な言ひますよ、料理人の和吉を殺したのはあなたでせう、これが横濱「假名がき新聞」に出ては大變だと殺したことは秘密にて、死んだことにして私等を欺した大惡人はあなたでせう」

甚五「エーッ」

と吃驚して居りますると、傍より旅館の主人溝口武兵衞

武兵「この甚五郎と云ふ人は私方に三月ほど泊つて居りますが、一寸も宿賃を拂ひませぬで困つて居ります、何うか署長よりお取立を願ひます」

と云ひまする、軈て田中署長徐ろに口を開かれまして

田中「お前方は何うも親子の情が無いが、そのよ長谷川甚五郎と云ふの

はお前の實の親か」

今まで隱して居りましたが之れを聞いておその申すやう

その「イエ阿父さんではございませぬ、これは妾の敵でございます……

この長谷川のために妾の阿母さんが殺されました」

田中「ナニ、長谷川にお前の母が殺されたのか、深く知るならば話をして見よ」

その「ハイ實は川崎大師に阿母さんが參詣を致しました其時に、妾の阿母さんを殺したのは料理人の和吉とこの長谷川とでございまする、そして其事が知れてはならぬと云うので、其後また和吉をこの長谷川が

殺したのでございます、眞實に此人は母樣の仇でございます」

フシ『此の物語を聞かれて田中の署長殿、何思ひけんコレ娘、一寸こちらを向いて見よと、左の耳の下をツク〳〵見れば間違ふかたなき見覺えの黑子、驚かれしも無理はない、自分の娘をその昔召し使ひに上げたる一人の娘、いつしか其の娘に伯爵殿の御子息の手がかゝり、胤をやどして生れたのがこのおその、それでは我娘宮のお腹痛めた可愛い其方が孫であつたのか、親は無くとも子は育つ、そだつて居れどこの苦勞はあわれぞと、忍び泣きする田中署長、人が悟れば一大事と』

田中『コレ甚五郎其方は、世に稀なる大罪人尚ほ警察に止め置き訊問すると其後で、それからそれと緒が浮世の機關、田中署長義理と人情の一卷が、如何なるのか又御披露つかまつる。』

乃木將軍信州紀行

京山若丸

月頭フシ『うつし世を神さりまし、大君のみあとしたひて我はゆくなり。』

フシ『從二位勳一等陸軍大將伯爵乃木希典閣下、日露戰役の當時、南山の激戰に長男勝典君を失ひ、次男保典君は二百三高地に於て名譽の戰死をなさる。』

凱旋の後一日先祖の墓參を思ひ立た、普通に乃木將軍で墓參をすれば汽車沿道の歡迎は大變なもので、何とかして秘密に參詣しやうと云ふ

考え、汽車沿道の人々の稼業の妨げをしてはならないと云ふ御考えから、書生の山本を引連、身には粗服を纏はれ、最も禮服は大鞄に入て之は携帶して居る、出て來られたのが飯田町の停車場、赤切符を買て三等待合の腰掛隅の方に腰打掛て居らるゝ、

「ノウ山本、」

「ハイ、」

「俺が恁ふやつて居る所は、お前の目から何と見える、」

「何うしても閣下、」

「コレ閣下と云ふては叶ん只單に主人と云へ、」

「ハイ、先私の見まする所では孤兒院の事務員が孤兒を連て地方へ行、莊家の惠でも受るやうにしか見えません、」

「成程、孤兒院の事務員としか見えぬと、評し得て妙じや、だが汽車の裡は徒然で困る、パンを求めやう、」

隱より取出す一の蟇口銅貨を四枚出してパンを求め、夫を隱に入てモ一發車の時間であるから改札口へ來る、白切符でもなければ青切符でもない閣下は赤切符である、陸軍大將伯爵が赤切符とは此後は知らず其頃始て〻御坐ひます、三等室へ乘込と

フシ『一聲の汽笛と共に發車する、三等室に乃木將軍』

「のう山本、」

「ハイ、」

「俺が今日三等室へ乘たが爲に餘程お前は不滿らしいの、」

「ソンナ事は御座ひません、」

「イヤ然だらう、今度の信州行は先祖の墓參の爲じや、心面白くなく詣た所で先祖に對して禮にならぬ、心面白く詣る考えで出て參つたが、汽車は三等が一番宜ヨ、二等何かに乘て見ろ、又一等室なぞに居る客を見ろ、何も渠等の態度を見ると不滿で可ん、何故ならば對偶で腰を掛て居つても敵同志の樣なもので些とも物を云はず只白眼合てば

かり居る、甚だしき奴は鞄を枕に横に臥る、婦人が來やうが老人が來やうが、更に席を讓らんともせぬ、鳥渡アレを見よ、此三等室の客はノアノ若者が老人に席を讓つて居るでないか、溫ひ情がある、公德心を有して居る、是が愉快じや是を見ると愉快じや

フシ『何しか汽車は上諏訪驛に着、下車をいたした將軍が。』

「山本コ、が上諏訪と云ふて、寒くなると氷すべりと云ふ事があつて、外國人なぞはわざ〳〵茲へ出て來て遊ぶのじや、旅館には諏訪ホテルなぞと云ふ立派な館があるが、茲へ一泊しやう、」

「夫では諏訪ホテルへ參りませう、」

「贅澤な事を云ふナ、此粗服で諏訪ホテルへ泊つて何うするか、向ふに旅舎が見えるアレへ行て一泊しやう、」

「アレハ貴下商人旅舎で俗に云ふ木賃宿で御坐ひます、」

「木賃旅舎でも何でも宜、今宵一晩だけの事じやないか、ドンナ不自由でも忍ぶヨ、」

來たつたは商人旅舎の門口

「御免なさい、」

と内部に入りました

「サア何卒此方へ、」

「今晩泊て貰ひたいのだ二人だが都合が出來るでせうか、」

「ヘエ何うも御氣の毒で御坐ひますが、室が塞へて居りますので、何一室空て居る然か、よし〳〵……旦那三番の室が空て居ります、三番室で三疊室と云ふは妙な譯で御坐ひますが、御二人で眠まれるか何うか知りませんが宜しければ御泊り下さい、」

「御主人宜ふ御坐ひませうか、」

「宜からう、夫が宜、處で宿賃は幾圓だノ、」

「御一人前四十錢で御坐ひます、」

「夫が宜からう夫では二人八十錢で泊てくれ、」

話が極つて乃木將軍は書生の山本と共に

フシ『すましたもので二階へ上り三疊敷の一室へ通る。』

聽て女中がお茶を持て來たが茶碗がコップだ其コップを手に取られた

將軍が

「山本是だから俺は田舍者が好だヨ、何事も質朴で、俺とお前と二人で今夜の止宿料が八十錢、夫に茶代を幾錢置くか未だ判らない其客へ直にビールを飲すとは愉快じやないか、」

「夫はビールじやありません麥湯で御坐ひます、」

「成程麥茶か然うか、」

最もビールも麥で製へたもの麥茶とて道理は同じ事だ、今お茶を喫で居る所へ主人は上つて來て

「御客樣御勞れで御坐ひませう、就ては洵に御面倒で御坐ひますがお名前と御所を御記なすつて下さいまし、」

フシ『差出したる止宿帳。』

是には將軍も困られた、幾ら陸軍大將でも僞名は出來ないと暫く考えて居られたがサラ〳〵と書て夫へ出して置、亭主は警察へ屆をしなければならないので其帳面を受取て降て行、披ひて見ると、東京赤坂區新阪町五十五番地……

「ウン東京の人だが、何う見ても田舍者らしい、軍人と……ア―在郷軍人か、何だ乃木希典……乃木希典、」

フシ『主人暫く思案をして居たが、何か氣が付たと見えて、拔足差足二階へ上り。』

襖を細目に開て見て居たが

「何うも乃木將軍に似て居るやうだナ、」

似て居るに違ひない、乃木將軍で御坐ひます、周章下へ降て來て

「オイ阿嚊アや、」

「何だヨ、」

「大きな聲だナ、此間大阪から送つて來た書籍を出しねへ、」

「何、書籍です、」

「ソレ日露戰爭の書籍だナ、」

女房が取出したる一冊の雜誌

フシ『大阪新報の記者行友李風氏が日露戰爭の當時、戰爭の有樣を、僅か四五十ページの小說に記載して發行なした日露戰史、最初の一枚を披ひて見ると乃木將軍が軍服姿のいかめしき寫眞あり、是を一瞥て主人は驚き、コヲ捨置ぬと警察へ屆ける、折柄町長も出て來る、此處ではお粗末で御座ひます何うぞ此方にお出を願ふと、案內いた

した諏訪ホテルの一室、女中を出して不禮あつては相成らんと、此間まで東京のお茶水の女學校にて學び居たる二人の娘、けわい化粧に身を飾り、お給仕として待らせる、閣下は善美を盡せし膳部を看め、暫し考え居られたが、此饗應は忝なけれど軍人には喰られん、是よりは當所の名物蜆の味噌汁を取寄せて貰ひませう』

質素なる閣下の仰に一同驚き、直に味噌汁を整へて持參する、將軍は夫を快く召喰る、此間に松本市へ將軍お出の由を知らせる、同所に於ては乃木將軍がお出と聞き、歡迎を爲さんと有志の人々停車場に出迎ひ今や來ると待て居ります、汽車が着と萬歳――、乃木閣下萬歳、其

聲天地に響き渡るばかり、處が將軍の姿が見へません、此跡の汽車で來るかと待て居りましたが此汽車にも見へない、

「何うしたのであらふ、閣下はお見へにならんではないか、」

「話を聞くに乃木將軍は至て質素な方でお服裝も粗末で御座ると聞いたが、都合によつたら普通の客に紛れて出てしまつたものではないか、」

「そんな事はあるまい、何うしたんであらふ、」

と汽車の着く度毎に閣下は居られたかと見て居りましたが、更に見へません、

フシ『是は見へぬ筈じや、松本驛の手前村井驛にて下車をして、地藏院と云ふ先祖佐々木高綱の墳墓のある寺院を指して行かれました。』

御存知の如く佐々木高綱は鎌倉頼朝に仕へ、梶原と共に宇治の渦流を乘切て武名を揚げたる英雄、其後仔細あつて鎌倉を去り、雲州松江在の乃木村に居られ、佛門に歸依いたしましたが、諸國廻國を思ひ立雲州を立て巡々て信州の村井と云ふ處へ來り、此處に病死いたされた、其遺骸を葬りし寺が地藏院、何人が石碑を建たか夫は判りませんが立派に墳墓も御座ります、夫へ將軍參詣としてお出になつた、

「山本、」

「ハイ、」

「先祖の墓に詣るに此粗末な服では餘りに不禮、何處かで禮服と着替ねばならぬ、幸ひ向ふに水茶屋があるがアノ椽を借て服を改め然して參詣いたさう、」

フシ『出て來られた主從が。』

「婆さん御免なさいヨ、」

「ハイ旅の人お休みなさいまし、」

「天氣續きで婆さん宜いの、」

「ハイモー此頃は百姓の繁忙い時での、天氣の快のが何よりで御座

います、」

「婆さん少々尋ねるが此向ふの寺が地藏院と云ふか、」

「ハイ、地藏院で御座ひます、」

「此寺の地内に佐々木高綱の墓があると云ふが、有るかの、」

「ハイ有ますわ、」

「誰か婆さん參詣する者があるかの、」

「そんな事は氣が付ません、有るかねェか判らねェ、然しのう旅の人、墓にも流行すたりがあるものか、アノ日露戰爭の旅順の陷落た時には墓へお詣りする者が澤山御座ひましたヨ、」

「然うかの、」

「何でも旅順で戰をせられた乃木と云ふ者の佐々木は先祖だとか云ふでお詣りに來る者が澤山ありました、」

「然うかのう、」

「然し妾は乃木と云ふ奴の先祖の墓だと聞たでお參りしませんヨ、」

妙な事を云い出したので書生の山本は婆の顏を見つめて居る、

「旅の人、乃木と云ふ者は俺が爲には敵だヨ、」

フシ『聞くに驚く乃木將軍、敵と云はれて捨置ぬ、』

「婆さん、大變な事を聞くがな、乃木がお前の敵とは何う云ふ譯じ

や、別段お前に辛ひ事もしまいと思ふが、」

「ハイ、語れば長い事ながら旅の人聞て下んせ、用があつて町へ行き親子連の人を見ると思はず涙が流れます、今更云ふも愚痴な事じやが、」

フシ『聞て下んせ旅の人、悴は山中嘉藏と申します、廿一の其年に高崎聯隊へ入營し、三年勤めて上等兵で歸りました、間もなく嫁女を貰ひ受け三人の小兒を設けて睦しく、波風立ず生活内、日露の戰で召集せられ、向ふ處は旅順港、悴は正直者じや好人物じや、其人の好い正直者をつけ込で、乃木と云ふ大將が悴を危ひ處にばかりつき

出して、トウ〳〵討死いたしました。』

「悴の友達は無事に歸つて來て、婆さん嘉藏君の遺物だ、何か持て歸らうと思つたが、何しろ身體は鐵砲の彈丸に對つて蜂の巣の如く、」

フシ『是が遺物とくれたるは、悴の髮の毛二三本、アノ神棚に祭つてある、夫から間もなく旅順が陷落、村のお方が乃木の先祖佐々木の墓へ參る歸り道、我家の表に立止り面當がましく婆さん旅順が陷落て萬歳じや、芽出度〳〵と云ふて行く。』

「何が芽出度のじや、悴が無事に歸れば萬歳であらうが、嘉藏が死で何が芽出度、旅の人アレを見さッせエ、アノ勳章も此間下つて來ま

したヨ、死だ遺物が今年八ッになりますだ、其孫が學校から歸つて來て、親の事を思ひ出すと見へ、」

フシ『足づきなして手を伸し、神棚にある二ッの勳章取り卸し、二人の弟左右に抱き俺等の親は此人だ、此勳章が父さまだと弟を抱いて泣て居る、其意地らしさ不憐さを推量なさんせ旅の人。』

フシ『折から表の方學校戻りと見へまして、破革提を小脇に抱へ入り來つたる其小兒は嘉藏の遺子の嘉三郎。』

「婆さん今歸つて來たヨ、」

「今歸つて來たでねエ、何だと云つてこんなに遲く歸つて來た、阿

母さん病氣でねエか、早く歸つて來て頭でも擦つて上げねえだヨ、」

「何にのう婆さん、今日は乃木將軍が松本へ來るで、先生に連れられて萬歳に往て來た、處が乃木將軍來ねエだヨ、」

「何吐す、そんな處へは行んでも宜ひ、他の人が來るなら往つても宜ひが、乃木輩が來るのに迎ひに行くには及ばねエ、お前忘れたか、阿父さんの敵でねエか、」

「夫でも先生に連れられて往つただから、然し今日は來ねエで歸れと云ふたから歸つて來たヨ、其歸る時に校長さんがのう屹度婆さんが怒るだらうから、是を見せて遣れと云つて歌ァ書て下すつた、婆さん

是を讀で見て下せエ、」

「何だ校長さんが歌を書てくれた、」

「婆さん讀で聞さう、恁ふ云ふ歌だ、好く聞てくれエ、宜ひか、」

フシ『一人息子と泣てはすまぬ、二人亡した人もある。』

頑是なき童が無邪氣に唄ふ此俚謠、

フシ『感にうたれた將軍が思はず其子を抱き上げ、堪忍せよコレ坊よ

お前が父を殺したは此爺だぞよ、乃木希典だ。聞に老婆は驚たり、

村の人々大騒ぎ、乃木大將は此人だと松本指して報知する、アー乃

木大將、世にありては軍人の神と仰がれ、死しては懶惰放蕩の子弟

の睡を覺す、是楠公の勳績と光り同じき山櫻、散り際淸き武士の魂

は此土に止りて護國の神と仰がるゝ。』

強盗士官

京山恭爲

フシ『惡中の善、情は他の爲ならず、廻り廻りて我が身にかゝる、茲は大森の八景園の山下に、降積る銀世界、枯木に積る六の花、五十に近き一人の男、乳兒を背に雪の中に持病の爲に打倒れて』

妻「何うか貴下氣を確に有て下さい萬一の事が御座ひましては、子供を連て妾が路頭に迷ひます、何うか貴下氣を確に有て下さい、モシ貴下、」

夫「アッ痛、飛でもないお前に心配を掛て氣の毒だ、何うか勘辨して

くれ、此通り妻子に苦勞を掛るのも他人に欺され競馬や相場に手を出して失敗したからじや、アー痛い、」

妻「貴下氣を確に、おみつや、」

光「ハイ、」

妻「父樣が御惡いからお前からもよく御介抱して、」

光「父樣氣を確に有て下さい、」

處へ上等の長靴を穿ち雪除の外套、頭巾に深く面を包み、降積る雪を踏分て通りかゝる一人、此容子を見て足を止たが

紳士「何うか爲すつたか、」

妻「ハイ有難ふ御座います夫が病氣の爲洵に困難を致します、」

紳「夫は御氣の毒だ、御見受申せば、此雪の降のに浴衣一枚、嘸寒い事で御座いませう、何か持合せの藥でもあるかへ、」

夫「御覽の通りの身なりで御座いまして、」

紳「アー然うですか、幸ひ茲に寶丹の持合があるから進上しませう、」

彼の紳士がポケットより寶丹を取出して與へる、夫が通じたと見えて、頭を上げ

夫　旦那樣有難ふ御座います、御庇で助りまして御座います、」

紳「納まつたかネ、」

夫「有難ふ御座います、」

紳「御見受申せば妻子を連て此雪の中を何處へ御出なさる、御言葉に少し關西訛言があるが、貴公は此東の人ではないナ、」

夫「ハイ私は江州彦根の者で御座います、」

紳「何方へ御出なさる、」

夫「東京へ參ります、」

紳「東京は何處へ行くね、知己でも便つて行くのかね、」

夫「私の弟が東京に居ります其弟の方へ參ります、」

紳「貴公の御舍弟の所へ、アー然ですか、東京は何處に居るね、」

夫「八年前に別れまして音信不通何所に居るか判りません、然し尋ねて參りますれば探し當らうと思ひまして、」

紳「夫は亂暴だ、八年前に別れて音信不通、加之彦根と違つて東京は十五區内、其廣ひ處を尋ねて歩くは雲を摑むやうな話し、東京へ着した處で御舍弟が判らぬとすれば何うするね、持病の爲に打仆れて居たを救助したも何かの因縁、向ふに見えるは僕の別莊で、僕は三浦と云ふものだが失禮ながら別莊へ連て行つて君方の面倒を見やうじやないか何うです一緒に行かぬか、」

妻「貴下、御親切に被仰て下さるのですから、行つて御世話になつたら如何で御座います、」

夫「夫では旦那様御世話を頂きます、」

紳「サア來給へ、」

ソコデ三浦紳士が親子を連れて些か坂を登ると立派な別莊がある、門を潜つて

三「アー今歸つたヨ、」

奥「御歸り遊ばせ、御歸りが遲ひので大層心配いたしました、」

三「然うであつたか、就ては一件の話は大成功であつた、」

奥「御芽出度御座います、御同伴が御座いますか、」

三「イヤ何所の方か知らぬが、雪の爲に持病に惱み夫には妻子を連れて此大雪に浴衣一枚、見るに見兼て邸まで連れて參つた、」

奥「オヤ然うで御座いますか、サア貴下此方へ御入んなさいまし、」

夫「いろ〳〵御世話になりまして何とも御禮の申さうやうも御座いません、」

奥「御見受申せば貴下單衣で嘸寒い事で御座いませう、夫に御在なさるは御内儀さんで御座いますかサア此方へ、」

妻「貴下が奥様で御座いますか、旦那様に種々御世話になりまする、」

三「オイ寒いだらう俺の垢付でも一枚出してやれ、」

ソコデ奥さんが取出した衣服

三「子供のは明日古着屋でも呼で身體に合た衣服を買てやれ、又平常までも子供を背負て居た處が仕方がない、下したが宜からう、」

夫「有難ふ御座ひます此子供は下す事が出來ません、」

奥「赤坊は何處か惡ひので御座いますか、」

夫「イヤ別に何處も惡くは御座いませんが、何うも下す事は出來ません、」

三「下す事が出來ないとは、」

夫「ハイ下す事の出來ないと申しますは此兒は死んで居りますので御

座います、」

三「何、此子は死んで居る、君は死んだ子を背負て居るのかへ、」

夫「ハイ、彦根を立て妻子を連れ汽車賃の貯へもなく杖に縋つて東海道を上り、昨夜神奈川まで參りますと、親子四人で十錢より貯へは御座いません、宿賃を七錢拂ひ殘る三錢で親子が咽喉をうるほして僅に露命を繋ぐ始末、昨夜神奈川の木賃宿へ泊りました十二時頃子供の變が渝りまして手足は氷のやうに冷たくなり全く息は絶て居ります、夜明て後木賃宿の御亭主に話をなさうと思ひましたがモー懷中には金はなし、夫から眠て居る態にいたしまして東京へ着し、弟を尋ねて葬式

をしてやらうと思ひ、之を背負つて神奈川を後にコヽまで參りまする と、雪の爲に持病が發り、打仆れて苦しんで居りまする所へ旦那樣が御出でになつて御助け下さいましたので、」

三「夫は氣の毒な次第、然し死んだ子供は今更何うする事も出來ないマア〳〵背の子供は下したが宜からう、」

と三浦御夫婦が親切に世話をしてくれ、翌日子供の葬式も立派に出してくれる、

三「ソコデ女房子供は僕の別莊に預かつて置、茲に御金が三十兩あるから之を入用に東京へ行つて御舍弟を索ねて見なさい、」

夫「ぢやァ旦那様行て參ります、おてつや俺は東京へ行て弟一郎を尋ねてくるから」

と三十金を懐中なし三浦紳士の別荘を立出で、大森の停車場、汽車に乘て新橋へと、

フシ『驛前を掛合て安ひ宿を取り、朝から晩まで十五區内を尋ね〳〵て御舍弟を、物の二十日も調べしが、八年前に別れ東京へ來た切り音信不通、雲を摑む尋ね方、廣ひ東京なり何で判らう、良之助は早や三十圓の金は失なり、是非なく東京を後に大森の三浦紳士の別荘に立歸る、旦那様に話をすりやァ、ソンナ譯なら今から彦根へ歸る事は豈夫出來まい、下女下男代りとして暫く別荘に御世話となる、或日三浦紳士が。』

三「良之助お前國で何を營業て居た、」

良「私は國で麹を製造して居りました、」

三「ハァ麹の製造か幾金資本金が有たら渡世が出來る、」

良「何、幾圓も要ものでは御座いません、」

三「玆に三百圓あるが、大森か八幡で麹製造を始めたら何うだへ」

三「旦那様御勿體ない仰せ、」

良「お前方を人間に爲やうじやないか、此儘下女下男に使つて居た所

でお前方の出世の目的もない、佛作つて魂入れずとやら、お前方を人間にしやうと思つて世話をしたのだ、コノ三百圓を以て麹製造を始めたら宜からう、」

良「旦那様有難ふ御座いまする、夫では御言葉に甘へまして、」と

フシ『三浦紳士の御世話にて八幡に來たつて假宅して、夫を資本に麹製造を始めたり大層皆さんの御世話になり、親子睦しく暮し活計の立のは三浦様の御庇なり、朝な夕なに別莊の旦那様や奥様の御機嫌を伺つて樂しく其日を送つて居りまする、或日の事で良之助が。』

良「お鐵、今日は横濱へ鳥渡用事で行て來るから、旦那様に賴まれた

辨天通り三丁目の石川雜貨店と、俺の用事を達してくる、就ては別莊へ御機嫌伺ひに行事が出來ないから、俺の代りに鳥渡行ておくれ、横濱まで用達に行て來るから、おみつ何だお前は衣服に泥なぞを付ちやア叶ない、女の子は惡戯するものじやない、横濱へ歸りには御土產を澤山買て來る溫和くして待て居ろ、」

フシ『大森より汽車に乘、横濱へ行、用事萬端整へて良之助が、遲れてならじと横濱驛、復も列車に乘車をする、汽笛諸共黑煙殘して發車する、進行中に良之助、煙草くすべて大森着を待兼る。』

向ふに居たは鳥打帽で半面を隱した一人の男、良之助の姿をデット見

て、

男「貴下、」

良「ハイ、」

男「間違ひましたら御詫いたしますが、貴下は江州彦根の良之助様では御座いませんか、」

良「ハイ私は良之助で御座います、私を良之助と御呼なさる貴下は、」

男「兄さんで御座いますか、」

良「ウン一郎じやないか、」

二「兄さんですか、」

良「一郎か此處に來い、腰掛を飛越て來い、」

二「ソンナ亂暴な事は出來ません、鳥渡皆さん御免なさい、」

言葉殘して腰掛を飛越て兄の傍、

二「兄さん、」

良「一郎か、」

二「御懷しゆう御座います、御無事な御顏を拜し一郎身に取喜ばしう御座います、」

良「其方も壯健で芽出度、時に一郎何所に居る、」

二「兄さん私の事より貴下が此横濱地方に來て居るとは實に思ひがけ

ない事で、矢張り商賣上で此方へ御出になりましたか、」

良「イヤ何から話をして宜か、先立ものは嬉し涙、俺も此方へ來て居るヨ、」

二「此方に來て居る、ヘエー貴下彼方の商賣は、」

良「一郎笑つてくれるナ俺は面目ない、邸まで他人手に渡さなければならぬ事になつて、國を出て今では此方へ來て居る、」

二「然うで御座いますか、欺されたとは申しながら貴下の樣な內氣な御人が相場抔へ手を出すのは失敗の原因です、夫から何うなすつた、」

良「邸も人手に渡して子供二人とお鐵と四人連、故鄕に居る事は面目

なくッて居られぬから東京に往つて居るお前を尋ねて萬事相談を爲やうと國を出たが、八年此方音信不通何處に居るか判らないが、是非會たいと東海道を登つて來た、」

二「然うですか、私も不實をする譯でも御座いませんが、人になるまで御便りをしないつもりで居りました、」

良「お前を尋ねて親子四人打揃ひ神奈川まで來ると、乳呑兒は死に其葬式も出せず、夫を背負て雪の中を大森の八景園の坂下まで來たが、持病が起つて夫に倒れ、已に死ぬかと思つた處へ三浦の旦那樣が通りかゝり、是々斯う云ふ始末、あげくの果三百圓資本を頂戴して、今は

八幡で麹製造を始め親子が無事に世を渡る様になりました、今日は横濱へ用事があつて參つた歸途、此の汽車の中でお前に會とは實に夢の様に思ひます、して一郎お前は何處に居る、」

二「私は東京京橋五郎兵衛町に居ります、」

良「然うかエ、何を遣つて居る、」

二「只今では京橋警察に巡査を奉職して居ります、」

良「豪い事を遣つて居るナ、巡査になつて居るか、判らんものじやナ、今日は休暇か、」

二「イエ然うでは御座いません、角袖ですから、」

良「ウーン、夫では探偵かエ、」

二「ハイ、」

良「豪イ出世をしたの、」

二「イヤ恐れ入ります、」

良「探偵ちウは六ケ敷ものださうだ、」

二「左様で御座います、隨分困難な事も御座います、就ては兄さん、今は妻を迎へて一人の子供も儲けました、」

良「夫は宜つた、今日は何か横濱へでも往たか、」

二「ハイ、捕者が御座いまして、」

良「捕へたか、」

二「署長の命令で横濱まで參りましたが、殘念ながら踪跡が判りませんん、」

良「然うか、隨分諸方へ行くだらうナ、」

二「朝鮮までも次第によつては行なければなりません、」

良「中々六ケ敷ものだ、」

二「時に兄さん、貴下は八幡に御在なさるか、」

良「然うじや、八幡に居る、何うだらう大森で降りて私と一緒に參らんか、三浦紳士に會てお前の口から禮を述て貰ひたい、」

二「宜う御座います、一日や二日貴下の處に居た處で差支ありますまいから三浦樣に御目にかゝつてお禮を申しませう、」

良「然うして呉れ、」

話の中に

○「大森、」

フシ『手に手をとつた御兄弟、嬉しく下車を遊ばしたり、驛前を後に仕つり良之助は一郎を連れて立戻る我家。』

良「お鐵今歸つた、」

鐵「大層お歸りが早う御座いました、」

良「喜んでくれ、用事も早く濟だ、お前御別莊へ往つてくれたか、」

鐵「イエ急に東京へ用事が出來たと被仰てお二人ともお出懸けになり明日でなければ歸らぬとの事で御座います、」

良「然うか、お留守では仕方がない、就てはお鐵一郎に逢たヨ、」

鐵「オヤ一郎さんに、」

二「姉さん、暫くで御座いました、」

鐵「マア一郎さん、何うなすつたの、」

二「汽車中で兄さんに逢ひまして委細の事は承はりました、種々貴下に心配をかけたさうで御座います、」

鐵「何う致しまして、貴下も御無事でこんな嬉しい事は御座いません、」

良「お鐵、一郎は今東京の京橋の警察の刑事巡査をして居つて、今日も横濱へ往つた歸りだと聞きました、」

鐵「マア貴下大層御出世を爲さいました、御悠くり遊ばせ、」

と云ふ處へ娘のおみつが歸つて參りました

光「阿母さん、」

鐵「お光かエ、此處に居るのはお前の伯父さんだヨ、」

光「伯父ちやんですか、」

二「姉さん是はお光ですか、大層大きくなりました、サア伯父さんが小遣を上げやう、」

光「阿母さん、伯父ちやんからお小遣を貰ひました、」

鐵「有難ふ御座います、子供が銀いお金を持て居てはお巡査さんに叱られます、サア赤いのと交換て上げやう、惡戯をしては叶ませんヨ、」

お光は喜んで又遊びに出る

鐵「貴下此方にお出なさいまし、何も御座いませんが、」

と早くも茶ぶ臺の上に酒肴が並ぶ

二「何うも御馳走さま、恁うして兄さんや姉さんと一つ膳に對ふのは

八年ぶりで御座います、ぢやァ頂戴致します、」

良「遠慮なく飲でくれ、一杯飲ながら悠くり話を爲やう、」

二「久し振で御座いましたナ、」

良「兄弟と云ふものは宜ひものだ、」

二「兄さん、大層痩ましたナ、」

良「心配をするから、」

二「心配は毒です、」

良「お前に逢たので氣丈夫になつた、」

と頻りに話をして居る

セメ『表の方へ戻つて來たのが三浦紳士』

三「お鐵や、良之助は歸つたかネ、」

鐵「旦那樣じやア御座いませんか、只今歸りました、」

良「是は旦那樣お歸んなさいまし、只今御別莊に伺ふと思ひましたが、急用で東京にお出になり、明日の朝でなければお歸りにならんと聞き御不禮を致しました、横濱の御用は殘らず濟みまして御座います、石川樣からも宜しくと申しました、」

三「大きに御苦勞であつた、」

良「時に旦那樣汽車中で舍弟に逢まして、御世話になつた事を申しま

したら、旦那樣にお目にかゝつてお禮を申したいと云つて一緒に是へ參りましたが、旦那樣は明日の朝でなければお歸りにならないと云ふので是に控へて居ります、是れ一郎、此處にお在なさるのが三浦樣だ、命の御恩人なり資本を出してくれた三浦の旦那樣ぢや、よくお禮を申してくれ、」

二「手前が良之助の舍弟一郎と申します、何ともお禮の申さう樣も御座いません、」

三「然うですか、貴公が良之助の舍弟でありましたか、僕は三浦と云ふものです、不思議な緣で良之助の面倒を見ました、」

二「有難ふ存じます……オッ、貴様は、」

三「アッ、」

二「強盗士官の大五郎か、貴様を縛せんと艱難辛苦をしたが、此處で逢たが運の盡じや、天網恢々疎にして洩さず、神妙にしろ、」

と庭を飛び下りる、驚ろひた強盗大五郎

大「しまつた、貴様は吉村刑事であつたか、」

逃げんとするを手早く手許に飛びついた

セメ『御用で、早縄の名人、捕縄を取出した、神妙にしろ、と向ふの小手にかけ、何處までと追かける、是を見たる良之助、弟待てヨ、

とバラ〳〵と跡を追て參ります。』

良「一郎待てくれ、」

二「兄さん他の事は肯ますが、此の事ばかりは承知が出來ません大五郎動くな神妙にしろ、」

と取押へて如何な放さぬ、良之助は是を見て

良「俺の爲には命の恩人、殊には子供の葬式も出して貰ひ、三百圓の資本を頂き、恁うして親子が安樂に送られるも三浦の旦那樣のお蔭だ、其御恩人に弟の手から縄をかけては申譯がない、兄が手を合して頼む、此の一回だけは逃してくれ、」

二「お默りなさい、此の吉村は見逃さうと思つても職務が見逃しません、」

良「是れ一郎、兄に免じて逃してくれ、親なき後は兄が親とやら、兄の言葉を背くか、」

二「法律が免しません、是を見逃しては社會に申し譯がない、」

良「社會に申譯は良之助がするぞ、」

隱し持たる一刀の鞘を拂つて、手首に捕繩をかけられた大五郎、逃んとするを押へんと爲す一郎、飛び來つた良之助、プツつり捕繩を切て

良「旦那樣お逃げ下さい、跡は私が引受けました、」

大「良之助忝なひ」

とバラ〳〵と逃げ行く奴、一郎は

二「兄さん、貴下罪人を逃しましたナ、」

良「弟、申し譯は此の通り、」

と取り直した一刀脇腹へブツリ撞と倒れて苦しむ良之助

フシ『逃げ行く强盜大五郎、追て行んと爲せば腹切て苦しむ良之助、跡へも先へも只た一人の兄樣じや、逃げ行し賊は兎にも角にも、兄の苦しみを見捨ては往ず、心二つに身は一つ、兄の身體に取縋り、はやまりなされた兄樣よ、何たる事を遊ばした、と云ふ處へ女房お

鐵に娘のお光が駈つける、始末眺めて我夫さまやお父さまやと取縋る、呼ど叫べど重傷に苦しむ良之助、何の答へも泣ばかり、お歎きなさるな姉さまよ、返らぬ話じや、兎に角邸へ迎へ醫師を招ひて手當爲したが其甲斐さへも情けなや、哀れ冥途の客となる、翌日檢視も終り涙ながらに葬式濟せ白木の位牌、お鐵娘の歎きは如何計り、吉村刑事は自宅に歸つて大五郎の行衞をと思案爲す折しも郵便と投込む手紙、披ひて見るなら良之助の情けによつて逃して貰ふたが、舍弟一郎氏に相濟ん、極月廿五日品川大森横須賀急行の列車を爆裂を持て破壞して望みを果す、吉村刑事に出張を願ひたし、強盜大

五郎より吉村刑事と認めたり、嘘にもしろ此奴逃してなるものかと吉村刑事が大森品川間の鐵路の間に晝夜分たず寢食忘れて非常線、二十五日新橋を九時四十分、横須賀急行爆裂彈を以て轉覆爲さんと謀る、吉村刑事が强盜大五郎に二度目の出會、如何になりますか……。』

青年立志談

川崎工學士

上

フシ『水は方圓の器に準ひ人は善惡の友に依、珠磨かざれば光りなし

東京四谷區内藤新宿天龍寺の門前に軒を並べし乞食小屋、不幸にして母は病の床に臥、十四の娘九才の少年、親に孝行餘念なく。』

是が我々社會の家庭でありましたならもし女が十四にでもなると裁縫をしまうと、金盥を提て湯に飛込で歸りには友達の家へ寄て芝居の話でもするとか、左もなくば二時間も混堂に入つて歸つて來ると姿見の

前で座り込で化粧に又二時間もかゝる、男の兒も九才になると學校から歸つて來て小遣を貰ひ表へ飛出し喧嘩をするとか惡戯をするとか、中々自宅には居りません、其化粧を爲たい遊びたい盛りの二人が母親の枕頭に逢て看病するは實に感心なもの、母は破れ俵を只一枚冠つて寢て居る

娘「阿母さま御湯でも差上げませうか、御藥は要らないの、」

母「今日は大變身體の工合も快から安心しておくれ御藥も要ないが、お前方は何か食たかへ、」

娘「薄粥を先刻頂きました、」

母「何故ソンナ偽りを云ふの嘘を云ふものではありません幾ら阿母さんが病氣で寐て居つても、お前達二人が食たか食ないか位ゐの事は知つて居る、食たふりをして食ない事は宜ふ知つて居ります、お前方が食ないのを見て妾が何で御藥一服も快く飲ませう、是から藤八さんの所へ行て辻占を五六十借夫を新宿へ行て賣てお出で、然して何か御喫なさい、」

娘「ハイ、」

フシ『母の病氣は氣がゝりなれど、云はれるまゝに姉弟は、乞食頭藤八の宅へ來て、辻占を貸てくれうと頼みますれば、乞食頭の藤八は

花も實もある男故。』

藤「寒ひの、アー可憐だ、見れば衣服も何も破れてしまつた、身體が出て居るじやアねへか、何宜よソンナ事を心配しなさんナ、親孝行と云ふものは何程見そぼらしい姿をして居ても、他所から見れば立派なものだ、年は十四だが阿母アの躾が良から裁縫も出來るし其他何につけても脫目はねへ、夫に容貌も好、ソイツを粧ふ暇もなし、看病をしながら辻占を賣て阿母を養つて居るとは實に感心なものだ、サア〳〵辻占を貸てやるから賣て來イ、」

娘「有難ふ御座ひます、」

藤「何しろ日は此通り暮てゐるし夫には雪も降て居るし、氣を付て行なヨ、オット危ね。へ、怪我はしねへか、宜かへ、」

姫「大丈夫で御座ひます、」

フシ『出て來た所が新宿の。』

寒さを冐して賣歩行、不幸にいたして其晩は只の一枚も辻占は賣ない爲に姉弟が、寒さも一層身に浸て

姉「賢次郎早く御出で、」

弟「姉さん寒ひよう、」

姉「何を云ふのです、御病氣の阿母さんは俵を一枚冠つて臥て居るじゃアないか、壯健な身體が何か寒ひのです、向ふは尾張屋さんだから御願ひ申して買てお貰ひ、」

姉に叱られ弟が尾張屋と云ふ貸座敷の軒に立寄り

弟「伯父さん辻占を買て下さいよ、」

○「復出て來やアがつた、厄介だナ、又今夜も自宅の花魁十六人は御茶挽だ、お前達が門に立と屹度一人も賣ねへのは不思議だナ、宜よ、花魁が何だ、一人でも御客樣が登つたら其方に頼んで幾枚でも辻占を買てやるよ、何卒其方へ行てくんねへ、御客があれば買て遣から、」

云はれて姉弟が尾張屋の軒端を出て二三間此方へ來ると、何に蹉跎た

か姉が、穿て下駄を返して仆れるとたん、足へ傷つけたものと見へ、再び立上る事も出來ない

弟「姉さん足から血が出て居るヨ、結ひて上やう、」

汚れし手拭を取出して姉の痛めし足へ手當なさんとする

姉「宜よ賢次郎搆はないよ、一筋しかない其手拭を破ひてしまつては是から先不自由です、何お前病氣の阿母さんの事を思へば何でもないヨ、大丈夫だよ、」

氣を勵まして歩もうとしても痛みに堪兼、用水桶を力に漸く立上つたが歩けない

フシ『暫し致すと、彼方より破れ股引に古き腹掛印絆纏僅一枚、首に手拭巻付て、素足に下駄、放蕩兒姿の男が來かゝり。』

男「馬鹿に寒ひナ、天當樣は人を殺さねへと云ふが人を殺しやアがる、能降じやアねへか、」

降來る雪をながめつゝ獨でボヤイて云やアがる

男「昔の人は旨へ事を云つたぜ、廓が明くなると家は暗夜になると云ふが夫に違エねへ、此頃は俺の家はノベッに暗夜だ……ヤイ汝等は何うした、何を泣て居やアがる、オヤ〳〵乞食だナ可憐さうに足に怪我をして居やアがらア、オイ小僧ソンナ事をしては叶ねへ、手の脂が疵

口へ入ると大事になる、俺が薬を遣らう、俺は大工だョ、宜か、此間お醫者様の宅へ仕事に行て足に怪我をした時に貰つた薬がある、又何かになるかと貯つて置たが、夫が今夜の役に立とは不思議だ、サア塗布てやるから足を出しな、何をグズ〳〵して居るンだ、」

男「何浸ると、浸るから利目があるンだ、ヤイソンナ汚ねへ手拭で結口先こそ至つて荒々しいが心根の溫順男か、足へ薬を塗布てやるひても叶ねへ、俺の手拭を遣らう、」

首に纏て居た新しい手拭を引裂で女の子の足へ繃帶をして遣り

男「何うだ是で宜だらう、」

姉「親方さん難有存じます、」

男「禮を言はれる程の事でもねへが、時に汝達は姉弟だナ然うだらう、何うも能似て居やアがらア、年は何才だ十四だ、ウン弟は九ッか、然うか可憐さうに寒ひだらう、處で俺は今年二十八だが、お前たちの親は繼親だらう、イ、エ隱すなよ、阿父さんは眞實だらうが阿母さんは違ふのだらう、お前たちの阿母さんは隨分甚ひ阿母さんだの、何……エ、病らつて居る、エーウーン然うか、モー宜ッて事よ、云つてくれるなョ、弱つたナ、聞たョ皆な聞たョ、厭に悲ひ事を云ふなョ、賴みだから何にも云つてくれるナ、アー俺は惡かつた、骨まで惡ひ人間だ、

モー惡ひ事は廢る、」

フシ『只今よりお前たち二人を龜鑑にする、惡事を廢る其上は、俺が今まで働ひて他人を泣した懺悔をする、マア寒からうが聞て吳れ。』

男「俺だッて前から放蕩者じやア無エよ、廿才の時には一人前の大工になり、廿一の正月の二日の日に惡ひ仲間に誘はれて此新宿に足を入れ、尾張屋のおくめと云ふ女を買たが病付で、夫から後寢ても覺てもおくめの顏が目にちらつき、何うしても忘られねへ、遂には親方を欺し借た金で女郎買、友達を欺しては遊びに行、他人の有を借たら貰つたも同然、後には一人の母親まで裸に剝て女郎買、此節は此新宿で放

蕩兒同樣、鈍漢な奴と見れば喧嘩を賣ては女郎買の資本を拵へる、今夜は此通りな雪でさぞおくめも寒ひだらう今日あたり上つてやつて一盃飲して樂々寢かして遣のが情夫だらうと、然し二兩の金がなければ登樓ことも出來ねへ、ハテ何うして算段したものかといろ〳〵考へたが、惡ひ智慧は出るもので、親方の留守を幸ひ、御內儀さんへ向つて嘘八百、母親が病氣に罹つて困りますが何卒二兩貸ておくんなさいと借て來た、思へば十五に足ねへ娘と十才に足ぬ子供が二人、親の病氣の看病から藥の一ッも服せたいと此寒空に辻占を賣、面目次第も無エ、今年廿八になる男が親の病氣と嘘を吐て借た金、實に俺は惡ひ人間だ

今から心を入替て眞人間にならなければ濟ねえ、サア惡ひ事を廢ると
なると此二兩の金の置所が無エ捨るのは勿體無エし、女郎買は出來ず
酒を飲事は出來ず、罪の深エ此金だ、其罪の深エ此金を親孝行の役に
立たら定めし金も浮ぶだらう、サアお前たちも此塞ひのに辻占なぞを
賣な、俺も江戸子だ此金を遣から早く歸ンな、決して贋金じゃア無エ
よ、若贋金だッたら罪は俺が引被る麹町六丁目大工の勘助だ、安心し
て遣ひねへ、」
と云ひながら金を出した時、向ふの尾張屋の暖簾を排て一人の女
女「鳥渡勘ちやん、」

勘「何だ、」
女「何だじやアないよモー歸るのかへ、おくめさんが待て居るよ、」
勘「何おくめが待て居る、誰が何と云ほふともモー女郎屋の二階へは
上らねへ、今コヽデ兩人の子供の話を聞て俺は眞人間に成ってしまつ
た、今日かぎり惡ひ事は廢た、」
女「アラマア那麼事を云つてさ、上らないなら其二兩のお金を置てお
出で、」
勘「馬鹿な事を云ふな誰が汝達に此金を置て行奴がある、今までさん
〳〵馬鹿にされたが今日かぎりモー遊廓には來ねへのだ、沒道理女を

相手に馬鹿な事を云つて口に風を引かした、サア此金を遣からお前たちは早く歸ンな、」

兩人「ハイ親方さん難有ふ存じます、」

勘「少しも早く歸ンな、ドレ俺も歸らうか、」

と立上る

フシ『跡に二人の姉弟が餘りの嬉さに寒さも忘れ、歩む足も地に付ず、喜び勇んで歸る途中、實母散と云ふ藥を二服求め、溫ひお芋を買て天龍寺前の小屋へ立歸り、母が寢臥だ枕頭にお芋と藥を夫へ置、サお喫り下さいお芋もあります御藥もと起して見れど答なし、あまり

不思議と姉弟が母の冠りし荒莚を靜に捲り、搖起せば、雪より冷たい有樣に、餘りの事と姉弟がワッとばかりに泣出す、乞食仲間が集つて二人の子供を不憫と思ひ、泣ではないよ姉弟よ、其方等二人の孝行は皆他人が知つて居る、俺等が死骸の始末すると、天龍寺の住職に賴み、梵刹の寺内に葬りたり、明る日よりも姉弟が破れ莚を小脇に抱へ、母の墓前へ御詣して、木の枝を折て墓に手向、土の團子を前へ供へ、南無阿彌陀佛、彌陀佛と唱ふる念佛の最哀れさ、必ず賢次郎忘るゝな、昨日の淵は今日の瀨と變るならひの世の中ぞ、今では辻占賣の乞食風情に零落たれど、以前をたゞせば武州の八王子

與力なれども武士の果、父は勤王の大義王政復古とやらを稱へた爲
竟に其身は浪人なし、薩摩の西鄕隆盛殿と弟の吉次郎殿と共に王事
へ盡し、越後口の戰に名譽の戰死を遂られた先祖の家名を汚すな
と、姉は弟に教訓する。』
話が一變いたしまして麹町六丁目大工の棟梁辰五郎、今日は職人の休
日と見えて、表の火鉢に凭れて煙草を喫で居る、處へ出て來た一人の
職人
○「頭梁、今日は、」
辰「何うした、」

○「何うも恁ふも御座ひません又御迷惑を願ひに出ましたが、」
辰「又金か、マヽにしろ、」
○「實はね少し義理のある友達に出遇まして鳥渡飲に行かなければな
らねへやうな事が出來たンで、洵に濟ませんが之だけ御貸なすつて、」
辰「何だ夫は、」
○「五貫貸て頂きてエものでで、」
辰「五貫と云へば五十錢か、氣の毒だが百もいけねへ四文も貸せねへ
よ、何を云つて居やァがる、酒を飲から五十錢貸せとは何だ、賭博を
して女郎買をし酒を飲、錢の無なるのは當然じやァねへか、汝のやう

な職人が居ると他の者が惡くなつていけねへ、早く歸つてくれ、」

勘「棟梁お寒ふ御座ひます、」

辰「勘公か能來たな、大層ニコ〳〵して居るが金でも拾つたか、」

勘「金なぞは拾ひませんが、考えて見れば有難ひ事で、」

辰「何だへ有難ひ事とは、」

勘「有難ひじやァ御座ひませんか、一月眞實に稼ひで居れば親方から十五兩づゝ貰へるンで、其金を以て近所の交際をしたり母親を無事に養つて行のですから、迚も今の所で財產を遺すなんて云ふ譯には參りませんが、只母親が壯健なのが何よりで、其嬉ひと云ふ心が自然と顏

に出てニコ〳〵するやうな譯で、」

辰「勘公夫は全くかへ、能云つた、俺は嘘でも信用するヨ、親孝行は嘘でも良、たとへ錢金が無つても其言葉が萬金だ、何うだ勘定の殘が五兩あるが持て行か、汝なら五兩でも六兩でも質を置ても貸よ、其處に居る助の奴郎を見ろ、友達と飲に行から五十錢貸てくれと云つたが百も貸さねへンだ、汝なら幾金でも貸すよ、」

勘「何うも棟梁有難ふ御座ひます、私もね近頃すつかり改心しまして ね、今の內稼がなければ稼ぐ所は御座ひません、モー人間も四十と來ると、頭にはポツ〳〵禿が出來て電氣と光を比べるやうになつちやァ

思ふやうには稼げません、然し私もモー二十八だ、早く女房を貰つて子供を拵へ國の爲にならなければなりません、處で棟梁先日鳥渡御話し申しましたアノ二人の小兒の事で御座ひますが、勘定の殘の五兩の金を御貰ひ申して何か旨へものでも子供と病つて居る母親に食して遣りたい、又古ひ衣の一枚でも買て遣てエと思ひますが何うで御座ひませう、」

辰「マア待てくれ勘公、夫は全くかへ汝が然う云ふ了簡に成たは實に嬉ひ、サア俺も江戸子だ、夫には大勢の人を使つて棟梁と云はれる者が之を聞て默つては居られねへ、オイ烏渡其所の古褞袍を出せ、宜か

ら出しねへ、ソンナ華美な衣を着られるものか、サア勘公此衣を其病人に着せて遣てくんねへ、夫から此に一圓あるが、是から天龍寺門前へ行道で鰻でも買て食してくれ、」

勘「棟梁夫は全くですかへ、」

辰「嘘は云はねへ、」

勘「難有御座ひます、何にも申しません此通りで御座ひます、私は貴下に是だけの御惠を受てコンナ嬉ひ事は御座ひません、さぞ此褞袍は溫で御座ひませう、二人の子供がドンナに喜びませう、鰻を食して此褞袍を被せた時の顔は……棟梁身體は茲にありましてもモー心は向

ふへ行て居りまして、喜ぶ顔があり〳〵と目の前に浮んで居ります有難ふ存じますドリヤ行ませうヨ、」

フシ『表へ出で來たつた所は天龍寺門前、何處が住居と見廻す所へ、向ふの方より乞食頭の藤八が。』

藤「親方ですかへ、」

勘「イヤ何うした藤八、大層容子が宜じやァねへか、乞食頭と云ふやうなもの、身分の卑ひ汝が、借家の二軒も拵がつて弱ひ者ばかり苛責て居やァがる、死んだら地獄へ行だらう、汝が地獄へ行かなければ行ものは無エぜ、夫は宜が何處へ行たンだ、」

藤「小屋を見廻りに來ましたが親方は何處へ、」

勘「親孝行の辻占賣を尋ねて來たンだ、」

藤「ヘエー、あれに就ては哀れな御話が御座ひますヨ、」

勘「何だへ其哀れな話とは、」

藤「實は母親が長の病氣で寢て居りまして、此間雪の降日で御座ひましたが、食物も無エやうな始末で、俺も氣の毒に思ひましたから辻占を五六十貸てやり、新宿へ賣せに遣た所が、一ッも賣ませんで、何うしやうかと姉弟が途方にくれて居ると姉さんの方が何に蹉跎たものか足に怪我をして歩く事も出來ません、シク〳〵泣て居る所へ破れ股引

尻切絆天首に手拭を卷付た博徒風の男が來まして、」

勘「ン、畜生夫から何うした、宜から終まで云つて見な、」

藤「二人の子供の有樣を見て、惡ひ奴でも情に脆ひ所があつたと見え段々容子を聞て夫は可憐だと、其博徒風の奴郎が、懷中から二兩出してくれたンで、」

勘「ン成程夫から何うした終まで云つて見なョ、」

藤「ヘエ、何しろ服裝が粗惡のに二兩出したので泥棒じやアねへかと思つたので、」

勘「馬鹿にしやアがらア、泥棒と間違へられて堪るものか、夫から何

うした、」

藤「夫から親方、二人は喜んで足の痛も勞も忘れ、溫ひ芋と藥を買て歸つて來ると何うでせう、母親は死んでしまいました、」

勘「何、母親は死んだ、」

藤「ヘエー、死去なりましたョ、兎も角も葬式は濟せましたが、固より親孝行の二人の事とて死んだ親を慕つて天龍寺の埋めた所へ行ては御念佛を唱へて居ります、」

勘「然うか、實は藤八二兩の金を遣たは俺だが、然しアノ儘にして置ては佛造つて眼入れずの假令、是から二人の面倒を見てやらうと思つ

てコヽまで來たンだ、母親が死んだのは殘念だが此儘には捨置無エ、サア藤八來てくれ、」

フシ『天龍寺へ參り、泣入る姉弟の後に立た勘助が。』

勘「恁ふ何うした、」

姉「伯父さんで御座ひますか先日は有難ふ御座ひます、賢次郎此間新宿で二圓御惠下すつた伯父さんが來ましたヨ、」

林「オヤ二圓の伯父さんで御座ひますか、」

勘「ベラボーメ今日は二圓ばかりじやアねへ、俺の金が五兩に親方から呉た金が一兩、夫に汝たちは食せやうと思つて鰻を買て來た、其上

褞袍まで持て來てやつた、サア鰻を食てくれ、鰻を食ヨ、早く食へ、」

姉「親方有難御座ひますが今日は精進日で御座ひます、」

勘「精進日も何もあるものか折角持て來た鰻だ食てくれ、」

勘助は涙ながらに二人へ勸め、兎も角も一緒に來イと

フシ『二人の小兒の手を取て歸り來たりし乞食小屋、彼の藤八と相談して二人の者の行末よけれと義俠心、深き惠に姉弟は乞食の群を脫したるが、竟に弟賢次郎が工學士と云へる學位を得て、花咲春に遇ふと云ふ實に青年の立志談。』

恨のピストル

京山恭爲

フシ『子爵華族は春日家の令嬢、春日若子が只一人、降出す雪の其中を、尋ね〳〵て來たりしは茲は神田の五軒町、破れた衣服に眞の出ました帶を締、髪の艶さへ今は失、最も姿は窶れたれど、何處やら香る雪の梅、梅田家の玄關先』

若「御免下さいまし、」

粗忽者の櫻井と云ふ書生が

櫻「ハイ何誰ですか、コレ何だお前は乞食ではないか馬鹿ッ、當邸を

何と心得る、物貰ひなら玄關へ參らんで勝手口へ廻れ、」

若「妾は乞食では御座ひません、御當家の若樣に御目にかゝりたいと存じまして態々參りまして御座ひます、」

櫻「何に若樣に面會したい、」

若「ハイ甚だ失禮では御座ひますが、春日若子と云ふ者が參つたと御取次を願ひとう存じまする、」

櫻「行け〳〵ソンナ事は知らん、貴樣見たいな乞食が若旦那に用のあるべき理由はない、行け〳〵、」

若「イヱ若樣に御目にかゝれば妾の身分も能判ります、何卒御取次

を、」

櫻「何と云ふても貴様のやうな奴を若様に會せる事はならん、」

若「貴下は甚麽者が尋ねて參つても御取次をなさるが御役では御座ひませんか、夫故一應若様へ御取次を願ひます、』

櫻「コレ失敬な事を云ふナ、僕は取次をする役であるが、乞食の取次は爲ない、」

若「夫では御取次下さらぬと被仰るのですか、」

櫻「取次事はならん早く歸れ馬鹿ッ、」

女「櫻井、お前何を云ふて居るノ、」

櫻「里子様ですか、今此乞食が參つて若様に面會したいと申して居りますが甚だ失敬な奴で、コンナ乞食の取次は出來ぬと斷はりましたに、お前は如何者が參つても取次が役であらうなぞと理屈を申します實に失敬な奴で、」

里「夫はお前の方が失敬ではないか、」

櫻「夫は何う云ふ理由ですか、」

里「お前は取次をするが役ではないか、其責任を果さぬやうな者なら當家に置ても何の役にも立ぬ、阿父様に申上て放逐をしますヨ、」

櫻「是は失敬しました、」

里「妾が聞かふお前は默つてお出で、」

櫻「ハイ、」

里「貴女は何方から御出になりました、若樣は御邸御出で御座ひますから私が御取次いたします、」

若「ハイ、御親切に有難ふ存じます、實は先日若樣に御目にかゝつて詳い御話はして置ましたが、何卒春日若子が參つたと御取次を願ひまする、」

里「貴女が春日の若子樣で、」

若「ハイ妾が春日若子で御座ひます、」

里「アノ貴女が、」

サツと顏色が變つた、是は小池鶴尾の娘で里子と云ひ、梅田家の怜敬之助の妻にならうと云ふ野心がありますが、然るに敬之助は里子を嫌つて居る夫は春日若子と云ふ婦人がある故だと知つて居りますから、今若子と云はれて驚きました

里「失禮で御座ひますけれどもお前さん見たやうな卑い方に若樣を會せる事は出來ません、お前のやうな者を若樣に會せては梅田家の名譽に拘はります早く御歸ンなさい、櫻井お前何をグズ〳〵して居るンだヨ、此の乞食を叩き出しておしまい、」

櫻「夫でも貴嬢が今何と云はれましたか、取次をするは僕が責任であるから一應取次をせい、其責任を果さぬやうな者なら當家を放逐すると云はれたでは御座ひませんか、」

里「妾の云ふ事を眞實だと思つて居るのかへ、妾の言葉には裏と表があるヨ、」

櫻「ハア然うでしたか、ヤイ乞食早く行け、早く行かんか、」

櫻井が若子を表へ引ずり出さうと云ふ、玄關先は大騒ぎ

フシ『表の方より曳込だる一挺の腕車。』

ガンと梶棒を突た

フシ『下車なされたのは當家の主人で梅田清藏、折りしも玄關先の此騒ぎ。』

車夫「御歸りイー、」

里「御歸り遊ばせ、」

清「何だ是は、」

里「アノ乞食が參りまして、」

清「何に乞食が參つた、」

里「ハイ、」

清「コレ櫻井何を爲る、」

櫻「失敬な奴ですから表へ引ずり出します、」

清「ソンナ手荒ひ事をしては叶ん、」

櫻「夫でも里子さんが被仰いました、」

清「里子が何と云はふとも然う云ふ事をしてはならん、早くお前は部屋へ行け、」

櫻「ハイ、」

清「其處を退け、」

櫻「ハイ、洵に濟ませんで御座ひます、」

若「若様に御目にかゝりとふ御座ひます、何卒御取次下さいまし、」

清「お前は何處の人だ、俺は當家の主人で梅田清藏と申しますが、怪の敬之助を尋ねて參つたお前は何と云ふ方ですか、」

若「妾は春日若子と申します、若様が御出なら一目會せて下さいまし、」

春日若子と聞て梅田清藏が

清「ウーン貴女は春日若子さん、若や貴女の阿父様は子爵華族の春日貫一様と云はれませぬか、」

若「ハイ面目次第も御座ひません、妾が其春日の娘若子で御座ひます、」

清「阿父様は何となされた、イヤ御逝去になりましたか、アー貴女は

淺間敷姿に御成遊ばしたナ、貴女の御父上には二三回御面謁を願つた事もありました、コレ里子何でお前は此方に失禮な事をするか、」

里「だッて若様に會たいと云ふのですもの、ねへ阿父様妾は若様の許嫁ですね、」

清「ソンナ事は云はなくても判つて居るじやないか、」

里「夫でも若様は隨分だワ、」

清「マア宜い萬事俺に任して置け、」

里「だッて若様が毎常も若子〳〵と云つてるのですもの、」

清「ソンナ事を云はんで其方へ行け、」

里「じやア御父様御任せ申します、」

其儘里子は奥へ行く、後に梅田清藏が

清「若子さん何か怜の敬之助に御用がありますか、然し敬之助には今の里子と云ふが許嫁で貴女幾ら思つて下すつた處が其甲斐は御座ひません、然し貴下の御身の立やうにいたしませうが、敬之助の事を思つては叶ません、マア此方へ御上りなさい、」

若子の手を取つて座敷へ伴込み、一室に待して置、主人の清藏は自分の部屋へ來る

フシ『變る話は敬之助、若子を忘れる暇はない、調べる本さへ若子に

見える、書物しても若子と書、今日も今日とて机に凭れて思案顔、折しも來たる里子の奴、恨み云はんと敬之助の傍へ寄り。』

里「若様、」

敬「何です貴下は若子さんですか、」

里「若子では御座ひません里子ですョ、」

敬「何里子だ、用はない彼方へ行けッ、誰に斷はつてコヽへ來た、」

里「本統に貴下は隨分だわ、妾は貴下の御嫁さんですョ、」

敬「君は僕の嫁だ〳〵と云ふが僕は君を妻とは思はんです、實に僕は君の顔を見ると嘔吐が出るンです、」

里「貴下甚ひヲ、」

敬「僕は君と談話する事も好まんです、那方へ行給へ、」

里「妾をソンナに御嫌ひなさるが貴下は乞食は好ですか、」

敬「何ですと、」

里「貴下は乞食を知つて居らつしやるわね、」

敬「乞食とは何だ、」

里「破けた着物一枚で今玄關へ來ましたョ、」

敬「里子玄關へ誰が來た、」

里「此寒ひのに破けた衣服一ッで、夫に心の出た帶を〆、若様に會た

いッてね、變な乞食が來ましたヨ、」

敬「乞食と云ふのは誰だしら、」

里「貴下能御存じでせう、春日の若子さんと云ふ方さ、今ね櫻井に吩付て表へ突出さうと云ふ處へ阿父さんが御歸りになつて……、」

敬「何に若子さんが僕を尋ねて來た、夫を櫻井に申し付て突出さうとした……馬鹿ッ、」

腹立まぎれに敬之助が里子の横面を撲倒した、其儘玄關へ走來たつて

敬「オイ櫻井、」

櫻「ハイ、」

敬「今茲に僕を尋ねて來た女があるじやらう、」

櫻「ハーアノ乞食ですか、」

敬「馬鹿ッ、乞食とは何だ、」

櫻「餘り衣服が汚いので乞食だと思ひましたが、」

敬「夫は春日若子と云つて僕の爲には將來の妻だ、僕の妻であれば貴樣の爲には矢張り主人であらう、其主人を指て乞食とは何だ、馬鹿ッ、」

（ポカリと打）

櫻「參つたアー、」

敬「其若子さんは何うした、」

櫻「阿父様が御出になつて六疊の御坐敷へ通しました、」

敬「ウン然うか、以來乞食なんと云へば早々屋敷を放逐するぞ、」

櫻「以後は注意いたします、」

若子の居ります座敷へ飛で參つた敬之助、襖を排て見ると

フシ『火鉢に憑れた春日若子、火箸片手に灰搔ならし、只た一人の親には死に別れ、頼みに思ふ若様には御嫁さんがあるとの事、是と知つたら尋ねて來るのじやなかつたぞへ、此行末は何とせう、暫し思案の折こそあれ、入り來たつたる敬之助、若子の姿を打眺め、飛立ばかりの嬉さに。』

敬「若子さん能來て下すつた、僕は君に別れて以來、何うしても忘れられんです。君能來てくれましたネ、僕は阿父さんに話をしやうと思つたが、極りが惡ひので今日まで話をしませんでしたが、能來て呉ましたネ、實に僕は嬉ひです、」

若「若様貴下妾を御嘲弄なすつたネ、」

敬「エッ、冗談でせう僕は何で貴下を嘲弄ませう、僕は將來の妻とすべきは貴女と思つて居るのです、」

若「夫でも貴下は阿父様の有仰に里子さんと云ふのが奥様ださうで御座ります、」

敬「イヤ其里子と云ふは成程僕に妻にしろと云ふ話もあつたが僕はア
ー云ふ者を妻とする事は出來ません、阿父さんが何と云ふても將來の
妻と云ふは君より他にないです、決して心配爲給ふナ、」

若「イエ貴下と這麼話をして居りまするとと阿父さんに叱られます何卒
其方へ行つて下さい、妾にソンナ事を有仰間に里子さんを大切にして
遣つて下さい、」

敬「イヤ僕は里子は大嫌ひです、誰が何と云ふても將來の妻とするは
君より無です、彼是面倒な事を父が云へば此屋敷を飛出してしまいま
す、時に若子さん貴下の阿父様は御全快なすつたですか、」

若「父は病死いたしました、」

敬「何です阿父様は歿なりました、ウン夫では貴女が跡には只た御一
人ですか、イヤ阿父様が死んでも心配なさる事は御座ひません、敬之
助が屬て居りますからドンナ事でも僕が引受ます決して心配なさいま
すナ、」

ポン〳〵と手を拍音

清「敬之助は居らぬか、」

敬「ハイ誰方です、」

清「此方へ通れ此方へ來イ、」

敬「阿父様ですか、」

清「用があるから此方へ來イ、」

敬「只今、」

清「早く來イ、」

敬「只今參ります、アノ若子さん直に來ますから待て居て下さい、淋しい心を出しては叶ませんヨ、少し待て居て下さい、」

若「行つて居らつしやいまし、」

敬「鳥渡行つて來ますから、ハイ御呼びになりましたか、」

清「此方へ來イ、」

敬「ハイ何處へ參りますか、」

清「此方へ來イ、」

連來んだのが離れ座敷

清「其處へ座れ敬之助、」

敬「ハイ、」

清「お前は馬鹿じやぞ、」

敬「ハイ、」

清「お前は馬鹿じや、」

敬「然うですか、」

清「然うですかとは何だ、」

敬「然うでは御座ひませんか親の口から我が子を指て馬鹿と云ふのですから然うですかと云より返答の爲やうはないでは御座ひませんか、」

清「ソンナ挨拶があるか、」

敬「之より挨拶の爲やうは御座ひません、貴下の目から見て馬鹿と云ふのですから馬鹿でせう、其馬鹿を産だ親の顔を見たいと思ふです、」

清「何に、何を云ふ、今一遍云ふて見ろ、」

敬「何度でも云ひます其馬鹿を産だ親の顔が見たいと思ふです、」

清「お前は困つたものだナ、」

敬「何が困りました、」

清「能考えて見ろ、アノ若子は無教育無財産の女ではないか、成程以前は立派な屋敷に生れたものでもあらうが今日は無財産の人間じや、然う云ふ者を梅田家の嫁にする事が出來るか夫に反して小池里子には五十萬圓と云ふ持参金がある、殊に教育もあり又財産もある、然らば夫をお前の妻としたら將來の利益であらう、當梅田家の財産と里子の持参金と合したれば百萬圓あるではないか、夫をお前が厭嫌て無財産無教育の春日若子を慕ふとは何う考えても馬鹿ではないか、」

敬「僕は阿父様他人の財産には目はくれません、里子は教育のあるか

財産があるが知りませんが、彼を妻とする考えは御座ひません、里子見たいな莫連な女は僕は顔を見てさへ心地が悪ひです、阿父様貴下が何と被仰ても僕は若子の事は忘れません、妻とするのは若子よりありません、」

清「夫では飽迄も親に對つて反對するのか、俺の云ふ事が判らぬか、若子の事は思ひ切て里子と結婚しろ、お前が何と云ふてもアー云ふ無教育無財産な者を當邸に入れる事はならぬ、」

敬「夫では若子と僕とは結婚させる事はならぬと有仰か、」

清「反對すれば邸へ置かぬ、勘當する、」

水「夫では勘當になりますか、阿父様僕は他人の財産を目的にはしません、勘當して下さいまし廢嫡して下さいまし有難く御受します、親子の縁を切たからには、敬之助は春日の養子となり春日敬之助と改めて社會に立ます、然し僕が春日の養子となれば貴下の財産五十萬圓里子の財産五十萬圓、合して百萬圓は無なりますぞ、詰り貴下方は無財産になりますぞ、」

清「何、無財産になるとは、」

敬「阿父様は悪人ですが僕は善人です、悪には加擔いたしませんぞ、阿父様貴下は何たる情ない御心でせう、春日家の若子を無教育無財産

には誰が爲ました、春日家の百萬圓の財産を誰が押領しました、阿父様貴下は天下の罪人ですぞ、敬之助は何にも知らぬと思つて御出ですが、僕は何事も存じて居りますぞ、里子の親小池鶴尾と貴下が二人共謀して春日家の財産を奪つたでせう、アノ春日若子は貴下の爲には御主人の御令嬢でせう、貴下は若子の親貫一御前の家令で鶴尾は家扶、其小池鶴尾と貴下は共謀して御前を押籠、而して百萬圓の財産を奪ひ五十萬圓づゝ分配したでせう、今親子の縁を切た以上は、僕は春日敬之助と改め、若子を連て出るばかり、氣の毒ながら貴下を對手取り貴下は被告僕は原告、裁判所へ持出しますぞ、」

フシ『氣相變て立上つたる敬之助、サ恁ふなれば親とは云せぬぞよ、六疊の座敷へ來たつて、泣じやないぞヨ若子さんと、手を取つた敬之助、梅田の邸を飛出し、裁判所へ訴へ出る、親子互に原告被告となり、玆に曲直を爭ふと云ふ、時間切迫又明日。』

青年立志談　川崎工學士

京山若丸

下

乞食頭の藤八に向つて勘助が

勘「藤八さん何とかして俺は二人の子供の面倒を見てやりてエと思ふが、月に十五兩しかとれねエ身で、母親と俺と二人の子供と四人では迚も十分な事は出來ねエが、何うにかならねエものかしら、責て一人の子供を學校へも遣てエと思ふのだが、」

藤「夫では親方御話をしますが、此子供二人は以前武州八王子の川崎

と云ふ士族の子で、」

勘「夫は聞た事があるよ、」

藤「處で此間死だ光子さんと云ふ方は、至つて堅ひお方で御座ひまして、其光子さんの妹米子さんと云ふは、此子供の爲に水も交らねエ立派な伯母さんです、夫が此四谷北伊賀町に相當な生計をして居りますから夫へ遣たら宜ふ御座ひませう、」

勘「然うなれば都合は宜いが然し何だか妙だな、現在立派な妹がありながら、何で光子さんが二人の子供を抱へて乞食なんぞをして居たんだ、」

藤「夫には親方譯があるんで、米子さんの亭主が死だ光子さんの氣に叶ねエ、本名は山本安藏と云ひ綽名をグズリ安と云ふ、博徒なんで、夫と別てしまへと度々光子さんが云つたさうですが俗に云ふ惡緣で別れられなかつたと見えます、」

勘「然うか何でも宜ひや、相當に遣て居るなら夫へ賴んで二人の子供の處置を付て來やう、夫までの間濟ねエが藤八二人の子供を預つてくれろ、」

フシ『立上つて行かんとするを。』

二人の子供は

兩人「暫く親方お待を願ひます、御親切は難有御座ひますが、阿母さんが、亡なられる臨終まで、ドンナ難義をしても伯母さんの所へ行くではない、濁つた水は飲なと云はれました、」

フシ『夫では母に濟ませぬ、不孝で御座る親方樣。』

勘「能云つた、マア宜ひよ俺に任して置け、お前たち兩人の惡いやうにしねエ、藤八賴むよ、」

フシ『表へ出たる勘助が、北伊賀町へ出て來る、山本安藏の宅、最丁寧に頭を下げ。』

勘「ヘエー今日は、」

女房「誰方此方へ御上ンなさいヨ、」

勘「少々お話があつて出ましたが、貴下は御當家の御内儀さんで御座いますか、」

女「ハイ然うで御座いますヨ、」

勘「私は麹町六丁目に居ります大工稼業の勘助と云ふ詰らぬ奴で御座ひますが、」

女「ハイ何ぞ御用で御座ひますか、」

勘「長ひ短ひお話をした所で仕方が御座ひませんが、貴下は以前八王子に御出になつた川崎さんの娘さんで、米子さんと被仰ひますね、」

女「然うですよ、」

勘「御姉さんの光子さんと何だか仲が惡くなつて居るとか聞きましたが、夫はモー姉妹常に翕ずとか申しまして、一緒に居ると喧嘩をしますが、偖永く別れて居ると會たくなるが姉妹の情で、其光子さんが天龍寺門前の乞食の群に入つて餓死同様な終焉方をなすつたので御座ひます、處が御存じの通り二人子供がありまして、惣領の姉さんおしげさんは今年が十四、弟賢次郎さんは九ツになります、其惣領のおしげさんは百人前優れた容貌で、其上利發者、又弟さんもおとなしい利發者で御座ひまして夫をうまく敎育だら大層なものになるに相違御座

ひませんが、今の様に乞食の仲間に入つて居ては行末が案じられますやうな譯で、何うで御座いませう、此方で二人を引取て何とかして下さる事は出來ますまいか、一時は喧嘩をなすつても、ソコが姉妹で御座います、何うぞ姉さんの忘れ遺子の二人を人間にして頂きたいものと存じまして參りましたが、」

玄「くだらない事をお云ひでない、何を云つて居るんだヱ、朝ッぱらソンナ事を云つて來て忌儀が惡いじやアないか、二人を引取たら宜らうがソンナ事は出來ないよ、早く御歸り、邪魔だよ、」

勘「何だ邪魔だと、モー一度云つて見ろ人間の言葉の遣ひやうも知らねヱで何を云やアがる、汝の亭主がグズリ安と云ふ博徒なのを笠に被て脅かして歸す氣だらうが、ソンナ事に驚く俺じやアねヱ、博徒が何だヒヨロッキが何だヱ、俺だッて通常の人間じやアねヱよ、隨分人も泣したり惡い事もしたが、二人の子供が親孝行するを見て改心して、今じやア堅氣になつて居るが、イザとなれば以前へ復つて手荒な事もする、ソンナ事はしたくねヱからおとなしく賴んで居るんだ、夫を何だ邪魔だから歸れとは誰に云ふ言葉だ、何れ仲間を揃へて汝の家を叩ッ毀しに來るから然う思へ、」

肝にさわつた勘助が荒々しく云い放ち、其儘歸つてしまう、

フシ』襖排て出て來る安藏。』

女「お前さん今の奴郎の云ふ事を聞たかへ、」

安「やかましいや靜にしろ、」

女「夫でもお前アンナ事を云はれて默つて居ては男が立ないよ、」

安「靜にしろと云ふのが判らねェか、女は姦いと云ふが夫に相違ねェ、汝の樣にさうお人よしでは俺の女房には成ては居られねェぜ、日頃近所の放蕩兒や娘を集めて三味線や琴なぞを敎へて、月に二圓や三圓の金を貰つて夫が働だと思つて居るが、些と目はしを利せろ、今來た奴がおしげと云ふ娘は今年十四になつて百人並すぐれた容貌を有て

居ると云ふじやァねェか、夫を引取て世話した處で向ふ二年か三年だ、大した金儲が出來るじやァねへか、」

女「そんな事は些とも氣が付なかつたわ、夫なら安さん早く行て何とか話を付てお出で、」

安「夫じやァ直に行て來るから、」

フシ『お金儲と表へ出た安藏が、來つたるは天龍寺門前、勘助に會て詫をする、アー安さんとやら流石は貸元、能出來ました、他人はお前を惡く云ふが、能道理の判る人、お前にめでて手渡しする、何うか子供の養育を願ひまする、別れる時に二人の子供の頭を撫、大き

くなれよしげ坊や、いたづらするな賢坊よ、默つて遊びに出るじやないぞよ、俺の住居を忘れるな。』

安藏は二人の子供を伴て來たが人は善惡の友に依、姉の方は毎日〳〵琴や三味線を仕込、弟の方は賭博場通ひ、何時となく惡さを見習ひ其上相手撰まず喧嘩をする、喧嘩を爲れば必ず勝、何も賢次を恐れるのではないが後にはグズリ安と云ふ厭な奴が從て居る、夫を恐れて此小僧の云ふなり次第になる、賢次は夫を良事にして俠客で賣出すは何の雜作もないと益々惡さが募るばかり、親孝行者である感心な少年だと謂はれた者がグズリ安に引取られてから自然と惡ひ感化を受遂に言語

同斷の惡者になる誰が云ふともなしに彼奴は强情な奴だ、身體は小さいが强情な奴だ、强情の賢次と異名をされる、姉が說諭をしたが更に肯ぬ、或日の事安藏は賢次を連れて賭博場へ行く、姉のおしげは伯母の用で鹽町まで往き、歸つて來ると見馴ぬ女と話をして居る、罪な事とは思つたが、おしげと云ふ聲がしたから臺所口で立聞くとも知らず叔母「今云つた樣な譯で、何うしても四百圓ばかり無ければ安さんの男が立ないので御座います、と云つて此家屋敷を抵當に入れた處で出來るものでは御座いません、夫をおしげが見兼て今まで受けた恩返し、何うか妾の身體で都合をしてくれと恁ふ申します、イエモー本統に不

器用者で、三年ばかり三味線を仕込で見ましたが、聲は惡し何うして
も藝妓にはなれません、一層吉原へ遣つた方が宜らうと思ひまして、
何分お願ひ申します、」

女「宜ふ御座います、アノ女ならば其位ゐの事は何うでもなりますか
ら安心してお出なさい、」

夫を聞ておしげの驚き一方ならず、

フシ『浮川竹の流れの淵へ一旦此身を沈めしならば川崎家の恥辱とな
る、と云ふてアー云ひ出した上からは不承知云ふても肯入れまい、
此上は勘助殿に話をして身の處置つけんと彼のおしげ、來りし處は

麹町六丁目大工勘助の住居なり、九尺二間の裏店住居、破れ障子が
立て居て上り端には畳が三畳、夫に老母が居ります、奥なる方を透
し見れば破れ屏風の後ろに當り最と苦げな息づかひ、樣子有げと彼
のおしげが勘助殿はと尋ぬれば、件の老母は涙ぐみ、貴嬢は何處か
ら來た人ぞ、悴は先の一昨日或る棟上げに呼ばれて、一杯機嫌で足
場より顚倒落ち、身體は骨まで打碎き、只今醫者の云はれるに藥で
命は保してあるが、コヽ五日とは保まいとのこと、死ぬは壽命と諦
めては居るものゝ悴勘助は死ぬる我身は厭はねど、臨終の際に成長
いたしたおしげと賢次郎の顏を一と目見て死たいと囈言ながら申し

まするを聞く辛さ、涙ながらに物語る、聞きしおしげの驚きは何と云ふべき言の葉も只泣ばかり、氣を取り直して妾がおしげと云はんとしたが、金を持て來て世話するではなし、却て歎きをかける因、何うせ命の無い身なら自分も生て此世に居らば苦界の勤をせにやらぬ、一層我身をすてゝ川崎の家名を清め勘助殿より一と足先に冥途へ參つて待受けんと決死の覺悟、老母に別れて只一人來りし處は四谷見付、此處ぞ自分の死場所と。』

堀端まで參りました、スルと六十格好の老人、が彼れ團扇で七輪の火を起して居るは、毎日此邊に出るおでんや、此寒ひのに氣の毒な事と

おしげは同情の涙にくれ、死に行く身は一層此老人を哀れに思ひ、堀端を進み來ると後ろに聞へる足音、何者かと見れば弟の賢次偖は伯父さんか伯母さんに吩咐られて自分を探しに來たに相違ない、見つけられては面倒と、此方へ密と身を隱す、處が賢次は何も姉さんを探しに來たのではない、おでんやの前へツカ〳〵と來て、

賢「オイ老爺さん、熱燗で一杯おくれ、」

爺「コレは若親分で御座いますかエ、何方へお出なさる、」

賢「親分の往て居る赤坂の賭場へ是から喧嘩に往くのだ、酒を飲なければ勢が無エ、熱ひ酒を一杯くんねエ、」

爺「ヘイ〳〵、」

賢「早く寄來せ此老爺、愚圖々々して居ると其荷を堀の中へ投り込でしまふぞ、ヤイ早く寄來せ、」

年に似氣なき賢次の暴言、聞たおしげは死ぬるを忘れて夫へ飛出し、

ーげ「賢次郎、お前何を云ふんだネ、何うしてソンナ惡者になつた、」

賢「又小言か、夏蠅エな、」

しげ「今妾が此處で聞て居たが此寒ひ中を年を老た此の方が、夜深更まで恁ふやつておでんを賣て歩ひて居るを、お前氣の毒とは思はないかエ、お金があるなら一圓か五十錢でも遣つて、伯父さん今日は寒いか

ら早く歸つて寢たら宜ふと云つてやるが老人を勞はる若ひ人の勤めじやアないか、相手が弱いと見下つて酒を飲せなければ其荷を堀へ投り込むとは何事だらう、」

賢「アー夏蠅、何も云いなさんな、酒はモー飲ねエから、ダガ姉さんお前が歸らねエので伯父さんや伯母さんが心配をして居たぜ、何故歸らないんだ、」

しげ「妾は歸りません、伯母さんが私を女郎にすると云ひました、」

賢「女郎になるのは結構じやアないか、乞食の成り上りが賭博打に貰はれ女郎になれば出世をした樣なものだ、姉さんお前忘れたか知らね

ェが、天龍寺門前の乞食小屋に喰ふや喰はずに居た時から見ると今は大層な出世だ、而て見れば女郎になつても文句はあるまい、」

聞たおしげは餘りの事に暫時何も云はず弟賢次郎の顔を見て居りましたが、

しげ「成程お前の云ふ通り女郎になるは厭だと云つたは私が惡ふ御座ひました、伯父さんにお目にかゝつて詫事をするからお前一緒に連れて往つておくれ、」

賢「厄介だな、是から喧嘩に行ふと云ふにお前を送つては行ねェ、」

しげ「ソンナ事を云はないで送つておくれ、」

賢「じやァ仕方がねェ一緒に往ふ、」

先に立て賢次が歩む、跡にはおしげ心の中に思ふ樣、

フシ『自分が命を捨るは川崎の家名を清めん爲其川崎の家を此惡漢が相續しては末は家名を汚すは必定、不愍なれども弟を殺して我身は跡から此世を去り冥途へ參つて先祖へお詫、又先立し兩親に不孝のお詫を爲さんものと覺悟極めて。』

しげ「賢次やお前首へ手拭を卷て居ては苦しからう、」

賢「何に苦しかない、」

しげ「寒さを凌ぐにはモット緩く卷なければ叶ない、サア私が卷てやら